

---

# 伯爵様のお気に入り

ジャーヴィス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

伯爵様のお気に入り

### 【Nコード】

N8447R

### 【作者名】

ジャーヴィス

### 【あらすじ】

母が浮気をしている。相手はなんと巷で有名なカノヴァス伯爵。平穩無事に日常を謳歌したいディアーナはカノヴァス伯爵に母から手を引けと言うのだが、反対に興味を持たれてしまい……。くさい台詞を聞くと鳥肌になるヒロインとカノヴァス伯爵の攻防戦が始まる。

## 伯爵様のお気に入り1

母が浮気している。

まあ、きちんと言えば父はもういないので、不倫にはならないのかもしれないけど。

つい半年前、父は急な病気で死んでしまった。原因は不明。だがそれからというもの、母はきらびやか社交界の場に出でては、男漁りをしている。

もともと恋多き人だったので周囲は特に何も言ってこないけど、私にとっては嬉しくない事態だ。

いや、不倫は当然のように嬉しくないが、それ以上に嬉しくないことが起きている。

この世でもつとも会いたくない男性、現在母の浮気相手であり、ちやっかり婚約者の地位にまで上り詰めた男、オルアレnciaカノウアス伯爵。

甘い顔立ちに、女性を虜にする話術。付け加えるなら、努力だけでは到底手に入られない確約された地位を持つ、超絶にかっこいい伯爵さまだ。

とろけるような微笑は年齢層を関係なく女性を虜にし、喉越しのよい極上の蜂蜜を想起させる甘く、優しい香りをまとう人。

彼に相手をしてもらえるのなら、たとえ火遊びであっても、散財しても構わないと公言する女性が後を立たない。

このセロティアン帝都で、彼の名を知らない人はいないとさえ噂されている。

だけど私はその人が嫌いだった。

なんと言えはいいのか、毛嫌いに近いかもしれない。

ただ個人的考えを述べさせてもらうのなら、何人もの女性と同時に付き合うなど、考えられない。

本当に紳士ならそんなことはしない。

白馬の王子さま、なんて夢物語を追いかけたりはしないけれど、甘いマスクの裏側には何を隠し持っているのか分からない、仮面を被った王子さまはお断りだ。

痕の残るような火遊びは、すべきじゃない。

私は中流貴族の家に生まれたごく普通の娘だ。頼りになる父がいる、美しい母がいる。

家は大きくないけれど、使用人の人たちはみな優しく、小さい頃から自慢にしてきた。

決して贅沢ではないけれど、ろうそくの灯りのような、そんなやさいな日々が幸せだった。そう、幸せだったのだ。ごく一部を除いては。

頼りになる父。これはいい。父は大好きだ。大きくて、笑うと、お日さまのような人だった。

だが母、彼女が問題だった。

若い頃から社交界で男を手玉にとってきた母は、結婚して私を生んでも、その美貌を衰えさせず、絶えず男性の求愛を受けていた。

もちろん、父が健在の時にはなびきもしなかったけれど、父亡き今、母は狂ったように男を取り替えては遊んでいる。

母とは言え、突き詰めて極論に達してしまえば他人なのだから、その人の恋愛に口を挟もうとか思わない。だけど……けれど、火の粉がこちらに降りかかるのなら話は別だ！

オルアレン¨カノヴァス伯爵に本気で恋してしまった母は、彼と結婚を考え出し、婚約してしまった。冗談じゃない。

私にとって、父は亡きデイクセン¨フォルスマイヤーただ一人。いまさら他人を父と呼ぶ気になどなれない。

それに、それにだ！

カノヴァス伯爵は母よりも私の年齢に近い。つまり、兄のような相手に向かって『お父さま』と言わなくてはいけない。そんなのは

想像するだけで身の毛がよだつ。

それ以前に、あの伯爵に向かって『お父さま』だなんて口が裂けても言いたくない。

男を手玉に取る母と同じように、女を手玉に取るカノヴァス伯爵。母は自分が遊んでやっているのだと勘違いしているが、明らかにカノヴァス伯爵に遊ばれている。

彼は私のためにプレゼントを、彼は私に会いに来る、彼は、彼は、彼は私のために、そうメイドたちに自慢して歩いている姿を見せられるのは勘弁してほしい。

仮にも自分の母だ、恋は盲目状態で、よく周りが見えていないよ。うだけど、客観的に見れば遊ばれているのがどちらかなど判りきつたことだった。

今日も今日とてカノヴァス伯爵が来るからと化粧に精を出している。メイド長が新しいドレスを母の部屋に運んでいるのを見た。

（伯爵が買ってくれたのかな？ お金持ちなのはいいけど……これで私に火の粉さえ飛んでこなければいいのに）

## 伯爵様のお気に入り2

「お嬢さま、お茶の用意ができました」

「ありがとうございます」

かぐわしいオレンジペコーの香りが部屋にやんわりと立ち込める。今はちょうど三時のティータイム。

これは私の日課で、三時には自室でお茶を飲むことに決めているのだ。

「メイソンさまからお手紙が届いておりますが、いかがいたしましたでしょうか」

「伯父さまから？ 何かしら」

手紙を受け取り、封を眺める。いたってシンプルな手紙だ。あまり派手な装いや催し物を好まないメイソン伯父さまの性格が出ている。

私は封を切って手紙を読み始めた。

内容はこうだ。伯爵と母の恋が冷めるまで、メイソン家に来ないかというお誘い。

「お見通しなのね、伯父さまは」

「いかがいたしましたでしょうか？」

「返事を書くわ。その間、私の部屋には誰も入れないで」というより、招いてもいない客を部屋に入れないで」

視線の先には、にこやかに微笑む男性。彼は壁を背に、いつの間にか用意された紅茶を優雅に掲げて挨拶する。

もちろん無視だ。できれば幻覚だと思いたい。

「ただ、私の願いは数秒で打ち砕かれる。

「ディアーナ。せつかく君に会いにきたのに、私には挨拶もないのかい？」

「お母さまの部屋は二階です。部屋を間違えないでください」

「私は君に用があつてここにいるんだよ」

「でしたら、用件を告げてさっさとご退出くださいな」

「冷たいね。いずれは親子になるといふのに」

「冷たいのは元々です、嫌なら別の人のところに行ってください」

「そうつれないことを言わないで。私は君に会いにきたのだから」

紳士的に笑って彼は近づいてくる。できれば半径5メートル以内に入ってほしくないのだが、この部屋の中ではそんな無茶な要望は通らない。

いつの間にかメイドは部屋からいなくなっていた。

こんな時には気をきかせなくていいのに、変なところで気のきくメイドだ。

伯爵は、部屋に私と自分しかいないことを確かめるとソファアームに座る。

「席を勧めた覚えはないんですけど？」

「行儀が悪いからね。立ったまま紅茶を飲むなんてはしたないだろう?」

「先程は壁にもたれて紅茶を飲んでいたじゃないですか」

「あれは持っていただけで、口はつけていないよ。香りを楽しんでいたんだ。君の家の紅茶はとても美味しいからね」

ああ言えばこう言う。

「メイドに言いますから、茶葉を持ってとっとと帰ってください」

「そういわずに。きちんと仲を深めておかないといけない。だろう?」

「何のために?」

「君が僕を知るために、そして僕が君を知るために」

人好きしそうな笑顔で話を振ってくる。彼の笑顔は腰砕けになるという話だけあって、実に紳士的で甘い微笑みだ。けれど、この笑顔に騙されてはいけない。

ほだされてはいけない。騙されてはいけない。警戒しなければ。

母のように、彼の言う全てにうなずいてはいけない。

「シェラーザはすぐに懐くと言ってくれたんだけど、あまりうまく

「いかないね」

紳士的な笑みで、優しい口調で、だけどその両方に私は顔をしかめた。

「結婚する気なんてないくせに」

「……どうしてそう思うんだい？」

数秒の沈黙の後、至極嬉しそうに問いかけてくる。

この笑顔の後ろに何を隠しているのか、考えるだけで身の毛がよだつ。

何を考えているのか、本心が見えない。だから苦手なのだ。

どれだけ優しそうな顔ができて、話術に長けていても、彼にとっては全てがゲーム。手のひらの上で終わるお遊びなのだ。

遊びに夢中になれば怪我をするとはよく言ったもので、彼は、女性たちが自分に夢中になるのを見て楽しんでいる。馬鹿にして、笑っている。そんな人が、いい人はずがない。

「カノヴァス伯爵、あなた、お母さまと結婚する気はないのでしよう？」

「……理由を訊いてもいいかな？ なぜ君は私がシエラザと結婚する気がないと思っているんだい？ 私はシエラザと婚約しているんだよ？」

「だって、あなたにとってのこれはゲームだから」

そう、ゲームだ。彼にとっては恋愛ゲーム。どちらが先に相手に惚れるか、相手の思考を巧みに操り、自分へと気持ちいを向けさせる心理ゲーム。

母は既に恋に落ちている。だとすれば、これ以上ゲームを続ける意味がない。恋は落ちた方が負け、それはいつの世も変わらない心理。

恋はより相手を求めた方が敗者となる。今回は母の負けだ、決着の見た勝負を、意味なく続けるなんておろかな真似をカノヴァス伯爵はしないだろう。

「お母さまはあなたに夢中よ。期待どおりの筋書きでしょう？」



「筋書きだなんて、私は真剣にシエラーザのことを」

「真剣に想う人がいるのなら場所を変えて他の女性との出会いを求めらるなんて、しないとと思うのだけれど？」

よく噂になつてゐる。顔がいいから仕方がないことだけど、カノヴァス伯爵の話はどこにいても聞こえてくる。

そして、傍には決まつて女性の姿。ことあるごとに、異なる女性をはべらしている。

「飽きたのなら早く終わらせてもらえないかしら。私にはいい迷惑なの」

「君はいつもどこか冷めた目で私を見ていたけれど、そんな風に思つていたのかい？」

「あなたの行為を聞いて、それ以外にどう見ると？」

冷めた口調だと、分かつてゐる。だけど、目の前にいる男性に対して必要以上に淑やかぶる理由も、好ましく振舞う道理も考えつかない。

好かれないなんて剣の先の塵ほどにも思わない。さっさと我が家から出て行つてほしいと、もう来ないでほしいと何度も願つたことか。

「あなたのおかげで私はいい迷惑なんです。ずっと言おうとは思つていたんですけど、私、あなたのことが嫌いなんです」

そう、いろいろと。

正面きつて言い切ると、なぜだかカノヴァスは目を閉じて、次いで腹に手を当てて笑い出した。

これは世に言う、爆笑。

「はは、いや、失礼。女性にそんなことを言われたのは生まれて初めてなもので」

「……貴重な体験をしましたね。二度目がない内に帰つて」

「よし決めた」

笑いが収まらない内に、なにやら彼は決意したようで、やはり笑いながらだが私の方を向く。

ひどく、嫌な予感が……

「シエラーザを落とすのには君に好かれていた方がいいと思って、いろいろ手を尽くしたが、まさか嫌われていたとは」

「好かれているとも思っていたんですか？」

かなり露骨に、態度に表していた気がするんだけど。

「失礼。女性に嫌われたことがないので、君の態度は不思議だと思っただけなんだ。露骨に態度に示していてくれたのに気づけなくて申しわけない。許していただけますか？」

恭しく礼をして私の手を取ろうとするカノヴァス伯爵。見られるほど美しい動作に目を奪われるのが一般女子なら、私はきつと一般外なのだろう。

おぞましいモノが自分に近づいてくると、全身が鳥肌を立てた。

ざつと身を引き、二の腕をこすり合わせて嫌そうな顔をしている私を見て面白そうに笑うカノヴァス伯爵。

「君は見ていて飽きないな」

屈託なく面白そうに笑うその姿は好青年そのもので、笑いの対象が自分でなければ、楽しいことがあったんだなーと思える。しかし、実際に笑われているのは他ならぬ私で、馬鹿にされているのも私だ。「もうシエラーザには興味がなし。今度は君にしよう」

何を？ とは訊き返したくない。

「どうせ、すぐに婚約破棄などできない。いちいちこの家に来るのだから、娯楽くらいあってもいいだろう？」

ほら見えた。一瞬の顔。

人がいいだなんて嘘もいいところだ、他人のことなど玩具程度にしか見ていない、そんな顔。

「私は娯楽じゃないんですけど」

「君が言ったんだよ。私はゲームをしていると。なら、君もゲームに参加するべきじゃないかな？ 私と君のゲームだ。さてどちらが勝つだろうね」

冗談じゃない。変なことに巻き込まれるのはごめんだ。

ただでさえ火の粉が降りかかっていたのに、これ以上の面倒ごとなんて……

「どうか、君が私を好きになってくれますように」

そう言っカノヴァス伯爵は私の髪を一束とり、キザったらしく口付けを施した。

### 伯爵様のお気に入り3

顔のいい人がかっこつけて喋るのとかは、見てみると寒気がする。と言えは怒られるだろうけど仕方がない。私はそういう人種なのだ。世にいる乙女たちに納得してもらえない。

もし地位とか、知識とか、その他諸々が同じくらいの方が二人いれば顔のいい方を選ぶ。

そこらへんは私も女の子だ。不細工よりは、かっこいい方が好きに決まっている。

かっこいい、何かできる。それは相手を異性として見る時に重要なポイントだろう。

まあ、簡潔に言って現在の私の心境は、早く終わってほしい、これなのだ。

「う、ご趣味は？」

「読書です」

「えっと、ぼ、僕もなんです。僕ら気が合いますね」

「そうですね」

日差しが眩しい。

ここは帝都でも有名なバラ庭園（フェアアリアン）。

数多いバラを広大な土地に植え、利用客に見物料を取る。一種の娯楽施設だ。

帝都一というだけのことはあり、見渡しても数えきることのできないバラの数。それらが職人の手により一層映えるようにと装飾されている。

乙女心をくすぐる愛らしい細工が人気で、もちろんデートスポットだったりもする。

「どんな本を読みますか？ ぼ、僕はビートルのアバンとかが好きです」

「そうですね」

日差しが肌に厳しい中、美しく咲いたバラたちがかくわしい匂いを放っている。

しかし、私の機嫌は激しく急降下中だ。

暑い！ 日差しがきつい！

あまり外に出ない、引きこもりで根暗な私は、自分に降り注ぐ太陽の光を忌々しげに睨む。

そうしたところで変わりはないが、いい加減疲れてきた。

興味のない話……というよりは要領を得ない、だから結局なにが言いたいのかわからない会話には、そろそろ飽きてきた。

けど、私とテーブルを挟んで座る男性は、それに気づいた様子もない。

母に言われてデートをしているのだが、はっきり言って馬が合わない。

会話のテンポが違うし、趣味などでも共通点は見つからない。

あちらが私に合わせて相槌をうっているのは見ていれば分かる。

「あの、ディアーナはどんな男の人が好きですか？」

出会ってからそれほど時間も経っていないのに呼び捨て。これも

苛立ちの一つではあるけれど、そんなのは表情に出さない。

「すみません、私、男性と言うと父くらいしか思い浮かべられなくて」

「男の方と、お付き合いは今まで」

「していませんわ」

驚いたように口をあけてくれる。

シェラーザの娘だと言うだけで、私にも結構ひどい噂が立っているのだ。

母のように男たらしだとか、悪女だとか、はたまたんでもないブスだとか、根も葉もない噂から、あながち間違いでもない噂まで幅広く周囲に伝わっている。

ああでも、暑い。本気で暑い。我慢が限界値を突破しそうだ。

「あの、フランソワさま、わたくし少し」

「え？ あの、ご気分でも悪いんですか？」

小太りのフランソワが慌てだす。

「いいえ、その、少し」

「僕、何かしましたか？」

「いえ、ですから」

「あ、飲み物ですね。すみません、ついあなたとの会話が楽しくて、すぐ取ってきてます」

こちらの言い分をまったく聞かず、勘違い甚だしい解釈をして飲み物を調達しに行ってしまうフランソワ。

母の知り合いの息子だから、このデートは断れなかった。

だから、いまさら急に帰るとか言い出してはいけない。

分かっている、分かっているけれど……

「うつつとうしい」

相手が視界から消え、戻ってこないのを確認すると本音が漏れる。手で風を送るが、微風すぎてまったく効果がない。

どうしてこんなに暑いのか、分からない。

体温は平熱だったし、風邪を引いているわけでもない。今は第5の月の中旬で若干日差しはきつみを帯びるが、それでも例年ならば体感して暑いとは感じないはず。

今年の夏は暑くなるのだろうかと思いつつ、周囲を見渡してみると。もちろん全てバラだ。小さなバラから大きなバラまで、色とりどりのバラが私を囲んでいる。

こんな場所が似合うのは、清楚で可憐なお嬢さんか、美人で利発的な女性だろう。

私のような平凡な人間には似合わない。分かっている。もしフランソワが母の知り合いの息子でなければ、絶対に来なかっただろう。揺らめいている視界。まるで蜃気楼のように。

「……蜃気楼？」

自分が出した言葉で、私は少し意識を取り戻した。どうやら暑さの所為で脳が停止気味だったらしい。

最初に感じたのは匂い。濃厚なバラの匂いに混じって、何かこげ  
る匂いがしている。

次に分かったのは悲鳴。誰かのソレれがバラ園全体を揺らすよう  
に響いた。

声の出所を探すと、見えたのは赤い柱。順路に沿って両脇に配置  
されているバラの柱が煌々と燃えている。

綺麗だなと思える分、まだ心に余裕はあつたのだろう。

しかし、眺めていても火は衰えるところを見せず、一本、また一  
本と燃え移り、確実にバラ園全体を燃やし始めていた。

「火事だ！」

誰かが言う。

「出口はどっちだ！？ おい、お前、押すなよ」

「退け、くそ退け！ マリーナ、こっちだ。速く！」

「マーマア！ マーマア！！」

「エルディリン、どこにいるの！ エルディリン！！」

次々と飛び交う言葉の嵐。

少し離れた火種の場所は、まるで嵐のようだ。

泣き叫ぶ子供、子供を捜す親、その親を邪魔だと退かす他人と着  
飾った女性。ハチャメチャな騒ぎだ。

「逃げないとだめよね。でも」

フランソワが帰ってきていない。

もしかしたら彼はこの騒ぎさえ知らないかもしれない。そう考え  
ると見捨てて帰ろうかという考えが薄れる。

デートに誘われたのに、見捨てて帰るのはさすがにダメだろう。

今後のお付き合い 個人的にはほしくないけど のためには、

フランソワを置いていくわけにはいかない。

「フランソワさまー、フランソワさま、どこですか？」

他人にまぎれて人を捜す。が、見つからない。

人波を逆送するけれど、それらしき人影は見えない。

どこに飲み物を取りに行ったのか、あのときちゃんと見ていればよ

かったと今更に後悔だ。

火は着々と周囲に燃え移り、周りを囲んでいく。人々もあらかた逃げたのか、もういない。

「これは、まずいわよね。逃げた方が、絶対いいわよね」  
でも、どっちに？

フランソワを探していた所為で、自分の居場所が分からない。

そもそも興味のない場所だったので、道順なんて覚えていない。連れられるままに歩いていただけなのだ、自分がどちらからきたのかなんて分かるはずもない。

道順とか、見所を馬鹿丁寧に示してくれる看板は既に燃えてしまっている。

仕方なく炎の通っていない道らしき場所を早歩きで進む。

途中、後ろでバラの柱が倒れた。火の粉がむき出しの肩に触れると、一瞬にして肩に走る痛さに顔が歪む。煙も出てきて本格的に危ない。

周りを見るけど燃えているバラしか見えなくて、出口なんて見えそうになかった。

八方塞で、どこにもいけない。

身動きが取れなくて、でもどうしようもなくて。

こんなとき、いつも一番に駆けつけてくれるのは父で、怖くなくても優しい声が自分を呼ぶのだと信じていた。

ふと思いついて唇を噛む。今は感傷に浸っても仕方がないのだ。

ああ熱い。熱い。とりあえず熱くて、どうしようもない。

「まったく無茶をするね、君も。私が口説き落とす前に、死ぬつもりかい？」

そうやって誰かは私の髪を撫でてくれた。

大きな手は温かくて、大好きな父を思い出す。

父もよく髪を撫でてくれた。



よくやったな、がんばったな、えらいぞ、泣くな、そう言っ  
ては撫でてくれた。父に名前を、ディアーナと呼ばれるのが好きだった。  
落ち着きのある温かい声で、まるで子守唄のような声。

私は、父が大好きだったのに

「ディアーナ」

……違う、これは父の声じゃない。

「ディアーナ、目を覚まさない」

父じゃない。大好きな人じゃない。この声は

「襲ってしまっよ？」

「死んでもごめんよ」

目を開けて見えるのは豪華な部屋。私の家ではないことは確かだ。  
そして余計なもの、カノヴァス伯爵が見える。

「私、黄泉の世界でも不幸なのかしら。伯爵が見えるなんて」

「幸運じゃないか、黄泉の世界でも私といられるなら」

「幸運？ 不運の間違いよ。絶対に嫌味言われて終わるだけだもの」

「ふうん、君は私のことをそんな風に思っていたのか」

数回言葉のやり取りをして、私は目をしばたかせる。

目の前に見えるのはカノヴァス伯爵。甘い微笑が私を見下ろして  
いる。頬を撫でる大きな手は、間違はなく彼のもの。

寝ていたのは大きな天蓋つきのベッドで、伯爵が私を膝枕して  
いる。

状況を確認すると身体が跳ね起きた、が、ベッドの上なのでバラ  
ンスを崩す。

「危ないよ。まだ寝ていなさい」

軽く支えられ、再び寝かせられる。

膝の上に再び寝かせられそうになったので、そこは意地で嫌がっ  
てみせた。

あまり抵抗と呼べる抵抗ができなかったが、私が嫌がっているの  
が分かれると伯爵は無理強いをせず、ベッドの上へとゆっくり横たえ  
てくれた。

身体が痛い。特に左腕がうずくように痛む。頭もまだ動いていないようで、なぜここにいるのか思い出せない。

「まったく、私に口説き落とすと言わせて、次の日に死にそうになった女性は君が初めてだよ」

「死にそうに？」

「覚えてないのかい？ 君はバラ園で火事に巻き込まれたんだよ。幸い命に別状はないけれど、腕がね……」

言ってカノヴァス伯爵は私の左腕を見た。腕は白い包帯で綺麗に巻かれている。

ひどく痛むのは火傷をした所為だ。

むろん、火傷をしたということは傷が残るということで、彼はそれを心配してくれているのだろう……たぶん。

嫁入り前の娘の身体に火傷の傷など、致命傷だ。

嫁入り先が決まっていれば問題ないが、そうでないなら本気でかわいそうな事態だ。

傷物の果物が売れないように、傷がついている女性は男性に好まれない。少なくとも、傷がついている方が好きだという人はいないだろう。

「傷が残るそうだよ。できるだけ残らないようにしてもらったけれど」

「別にいいのに」

嫁に行く気なんてない。

誰かを愛するつもりもない。

母があんな性格だからだろうか、私は恋愛に対して真剣になれない。

どれだけ愛しても、たとえば本当に愛し合って結ばれても、死んでしまえば泡として消えてしまうのだろうか。

母が、浮気性な母が父だけを求めた。でも、父が死ぬとすぐに彼女は違う愛を求めた。

そんな風にすぐに移り変わってしまうものなら、愛などというも

ノに執着なんてできない。

誰かに愛していると言われても、そんなもの、信じられない。

「結婚するつもりがないので、気にしなくていいです」

「恋愛は大切だよ？」

「あなたが言いますか、その台詞」

「恋が真剣にできないからといって、恋心ないがしろにしているわけじゃないよ、私は。誰かを愛する心は、とてもすばらしいものだと思うけれど」

「そうですね」

ダメだ。何だかとても卑屈な気分だ。

どうしてだろう、言いたくもないのに、カノヴァス伯爵の前で愚痴を言ってしまうそうになる。そんな口を必死に引き締め、眠いと告げてみた。

すると彼は分かったと言って、私の髪をひと撫でする。

温かい手のひらの温度、そこだけは彼を好きになれそうな気がする。

「お休み、ディアーナ」

そう言って部屋を出て行く。後姿までかっこいいだなんて笑える話だ。

いろいろ考えなくてはいけなかった。

ここがどこかだとか、なぜ助かったのかとか、フランソワはどうなったのかとか。

でもこの時の私には、そんなことを考える余裕がなかった。

ただ眠くて、腕が痛くて、傍にいないはずのない人を思い出すと悲しくて

左腕を抱きしめて、私は少しだけ泣いた。

## 伯爵様のお気に入り4

「われ先に逃げていた？」

はしたないと知りながら、あんぐりと開いた口が閉じなかった。目の前に行儀よく立つメイドは私の 乙女のものとは言いにくいだろう現在の 顔に困惑して、でもきちんとうなずいてくれる。腕の包帯はまだ取れない。医者いわく、あと一週間は巻いて주세요とのこと。

別にいいと告げてみてもみたが、傷跡をできるだけ残さないためにはアフターケアが必要だと、熱心に諭されてしまった。

メイドが口を開く。

「はい。お姿が見えなかったと、お嬢さまから伺ってありましたので、ラブレー家に確認致しましたところ、フランソワさまは当日にお戻りになられたそうで」

「つまり、自分だけ逃げたのよね？」

「それは……」

言葉に詰まってしまうメイド。

あなたを困らせたいわげじゃないのに、私の機嫌は急降下していく。

別に助けてほしいとは思わなかった。でも、でもだ、あちらがデザートに誘ってきたのに、何も言わずに去るとはどういう見なのだろう。

しかも、あの日からゆうに三日は経つのに何の連絡もない。

この様子では私の身を案じてもないようだ。

「くそ、あのデブ」

「!?!」

「ごめん、気にしないで、独り言だから」

「そ、そうでございますか」

つい本音が口から滑り落ちるとメイドは引きつり笑いをして返し

てくれた。

アラビアンでの火事から三日。

カノヴァス伯爵にとても情けのないところを見せてから二日。

家に帰ってきてから一日が経つ。

自室がこれほどまで落ち着ける場所だとは知らなかった。本当に

引きこもりになるうかと考えてしまう。

「そつえば……先ほどカノヴァス伯爵さまがお見えになっていました」

「そつ」

「お嬢さまの見舞いに顔を出してもいいかと訊かれまして」

「絶対嫌よ、あの人と会うなんて。怪我してるのに余計に傷が開くわ」

「冗談じゃない。二日前のあの時、情けない姿を見られているのだ。父が恋しくて温かい手に少し心許しそうになっただけ、あれは一時の迷い。」

魔が差した、そう、魔が差したのだ。

メイドはいつものように紅茶をセットし終わると恭しく礼をして退出した。

私はベッドに座り、扉の方を見る。20はあるだろう箱の山が見える。

誰が送ったのかなんて分からないけど、あれら全てが見舞いの品らしい。

新手の嫌がらせか？ 私の部屋が狭いと知っての行為？

無駄に箱が大きいので本当にうっとうしい。

一々開けて中身を確認し、お礼の返事を書かないといけないと思うと本当に面倒くさい。

「暇人が多いわ」

私なんかのご機嫌をとろうとするなんて。

母が狙いなら母に貢げばいいものを。

「『将を射んと欲すれば先ず馬を射よ』これは物語の中のセリフだ

「つたかな」

「……伯爵」

「なんだいディアーナ、そんなに眉を寄せて。可愛い顔が台無しだよ？」

「いつからいました？」

「君が君をデートに誘った男をデブと言ったところ、くらいからかな」

「ほぼ最初じゃないか……」

カノヴァス伯爵は楽しそうに笑って部屋の端の方にある物影に隠れていた。なんだろう、物と物の間？ 偶然できた微妙な隙間に挟まっていた。

世の乙女が見たら嘆くだろう。

「あなた、自分で自分をかっこいいとか思わないんですか？」

「思っているよ、人並みには美的感覚を持ち合わせているつもりだからね」

「なら、どうしてそんなところに」

「挟まっているのに飽きたのか、伯爵が隙間から出てくる。」

パンパンと服を叩き、洞穴から出てきた探険家のようなしぐさで天井を見つめ、目を細めた。

「よく身体が収まりましたね、あの隙間に」

「慣れているからね、隠れるのには」

「そうですか」

もう驚かない。この人がどこから現れようと、驚いたりしてやらない。

「というより、今すぐに出て行ってほしい。」

「今すぐ出て行って」

「『将を射んと欲すれば先ず馬を射よ』、これがどういう意味が分かるかい、ディアーナ」

誰も勧めていないのにソファアールへと座り、さも当然のように紅茶を飲む。

「これは故人が伝えた言葉だそうだよ。欲しいものがあるのなら、その周囲から固めていけという意味らしい。あの箱だけ奇妙に飾り立てた品々は、君の母親を狙う下心あり、かつ狡猾な男からの物だ」

ずびしい、と指差して教えてくれるけど、そんな真面目に言われなくても反応に困る。

「それくらい分かっています。勝手に紅茶を飲まないで」

「君の分も淹れてあげよう。怪我はもう大丈夫なのかい？」

伯爵のお茶を邪魔しようとするのと近づくと、彼は本当に、むかつくくらい嬉しそうに微笑んで私に紅茶を淹れだした。

ティーポットを取り上げようと手を伸ばすが、必然的な身長差に歯が立たない。

近づくと優しい香りがする。蜂蜜の甘い匂いが、でも甘ったるくなくて、少し離れるとすぐに消えてしまう匂い。

「こらこら、危ないよ。紅茶を淹れているから大人しく」

「淹れてほしいなんて言ってます。ティーポット置いて、ティーカップ置いて、回れ右九十度してご退出ください。母の部屋は二階だって、何度言わせるんです」

「もうシエラーザには会ってきたんだよ」

「だったらもう用はないでしょう。帰って！」

「何に苛立っているんだい？」

紅茶を淹れ終わり、ティーポットを所定の位置に置きなおすとカノヴァス伯爵は私を見た。

初めてじっと見つめあう。今まで何度か会話をしたことはあるけれど、こんな風に真正面から彼を見たのは初めてだった。

コバルトブルーの瞳は、意外に綺麗だ。

「ディアーナ」

すつきりとした鼻筋、薄い唇に、ふとした視線が誰かを引きつける瞳。ああ、まずい、鳥肌が立ちそうだ。真剣に見つめあうだけでなく、乙女チックで気色悪い。

「君にそんなに見つめられては照れるな。その眼は水面に浮かぶ月のよう。魅惑的な瞳に魅入られるとはこのことなのだろうね。ずっと見つめられているのに飽きないだなんて、不思議だ。私はね、デИАーナ、君を好ましく思っているんだよ。これは間違いない。君は私を端から悪人だと思つて接している。だから別に取り繕う必要もないと最初はそう思っていたんだ。でも君は小鳥のように危なっかしくて、どうしてだろうね、目が離せない。私は君に恋してしまつたのかな、それとも」

「もう、勘弁して」

「……何を？」

「勘弁してください。もう無理」

「何が？」

人のいい顔で極悪人なカノヴァス伯爵は、嬉しそうに笑つて訊いてくる。本当にとろける笑みだ。

私もとろけそうだ、脳とか、脳とか、脳とか。とろけて腐つてしまいそうだ。

何が嬉しくて舞台セリフのようなキザな言葉を聞き続けなくてはいけない？

「君は舞台が好きだと聞いたのに」

「それは舞台だから好きなんです。舞台上の物語、その中で息づく人々のセリフだから多少キザでも許せるんです」

舞台は好きだけど、それは舞台だからだ。日常会話で気障なセリフを聞くなんて……あれ以上聞いていれば、きっと蕁麻疹が出たに違いない。

「この作戦はダメか。いい案だと思つたのに」

と言つてカノヴァス伯爵は懐の中に入つてあつた紙をクシャリと潰し、ティーセットの入つていたラックの上に置いた。もう要らないということだろう。

私はその紙を取つて広げてみる。

「案外役に立たないね、物語は」



「……カンニングペーパー」

「暗記するのに多少なりの時間を割いたんだよ？　なのに君ときたら嫌そうな顔をして、しまいには鳥肌を立てたのかい？　……まったく、君は女性じゃないのかな」

「それは女性に対する冒瀆です。甘いセリフとか、キザなセリフに鳥肌立てて嫌がるのは私だけじゃない……はずです。それより、なんですか、これ！」

「これ？」

「さっき言ったセリフ、全部書いてるじゃないですか。まさか、いつもこんなことしてるんですか？」

「いつもじゃないけれど、ときにはするよ。そう甘いセリフがポンポン思いつく方ではないからね。私だって苦労している」

「だったら口説かなければいいのではと、思っではいけないのだろうか。」

「私ならこんな面倒なことしない。」

「女性に限らず、人には好みがあるからね。その人に好かれたいのなら、まずはその人が好むことをすべきだと思うよ。ちなみに私は抱きしめてもらえるのが好きだから」

「誰も聞いてません、そんなこと。腕を広げても飛び込みませんか」

「地道な努力を実は重ねているんだよ。見直したかい？」

「長い足を組み替えて伯爵は紅茶を飲む。私もいい加減立っているのに疲れたので彼の横に腰を下ろし、注がれた紅茶に手をつけた。」

「黙っていればかつこいいだろう。」

「いや、かつこいいことをしても、かつこいいのだろう。なのに、どうして」

「幻滅しますよ、こんなことしたら」

「伯爵に理想を抱いている女性が、こんなことを知ったら幻滅するに違いない。」

「理想の王子さまが、実は紙に書いてある言葉を読んでも、な」

んて知つたら」

「でも君は幻滅なんてしないだろう？ 私に理想を抱いているわけじゃないのだから」

それは、したくもできない はずなのに。

「理想像がないのなら、それが崩れることはない。王子さまの像を描けないのなら、幻滅することもできない。違うかな」

そうだ。目の前の人が奇行に走ったところで、私は幻滅なんてしないはず。

「でもね、誰でもみんな理想は持っていると思うよ。男の子なら理想のお姫さま、女の子は理想の王子さま像。それが現実に存在するかはさておいて、けれど理想は誰もが持つものだと思っうね。だからもちろん、君にも存在すると思う。理想の王子さま像が」

飲み終えたティーカップをソーサーに置き、立ち上がると伯爵は扉へと向かい、扉を出て行く直前で、

「私は君の理想の王子さまになりたいな」と捨てセリフを吐いて出て行った。

どうしよう、身体が震えておかしくなってしまうそうだ。と……

鳥肌が！！

## 伯爵様のお気に入り5

「とてもすばらしい劇でしたわ」

「そう？　気に入ってもらえて光栄よ。ディアーナは私と趣味が合  
いそうね」

「はい、ローレンシアさんが一緒でとても楽しいです」

「ふふ、可愛いこと言ってくれるわね。……ねえオルアレン、この  
子、私がもらってもいい？」

そう言ってローレンシアさんは後ろの席に振り返った。後ろの席  
ではふてくされ気味の伯爵がいる。暗くてよく見えないけれど、上  
機嫌ではないのは確かだ。

現在、私のいる場所はオペラハウスの二階。眼下では幕の閉じた  
舞台が見え、オーケストラの人たちが退場していくところだ。

なぜこんな所にいるのかと、それは話すと長い。

先日、私は火事に巻き込まれて、カノヴァス伯爵に助けられた……  
と想っていたのだけれど実は違って、あの時に運び込まれた家は  
眼前の美女、ローレンシアさんのものだったのだ。

現場にいた伯爵が偶然近くで顔見知りの家に私を担ぎこんだ。そ  
れがローレンシアさんの家。

わけも分からないまま家に帰った　というより、勝手に帰って  
いた　ので、あの家はカノヴァス伯爵の所有物だとずっと思っ  
ていたのだ。

見ず知らずの私を助けてくれた人にお礼も言わず、既に何日も経  
っている。ということ、いきなりだがお礼に押しかけたところオ  
ペラに誘われ、現在に至る。

ちなみに、カノヴァス伯爵は他の女性とオペラハウスに来ていた  
のだが、ローレンシアさんがこちらに来ていと命令すると、相手の女  
性を言葉巧みに説得してしまった。

「ローラ、ディアーナはモノじゃないよ」

「あら、私はディアーナをモノだなんて欠片も思っていないわ。もしディアーナがモノなら、あなたに了承なんて取らず、力づくで奪うから」

「やれやれ、危険な女性だね、君は」

「そこが私の魅力よ」

「まっただ」

悪友のそれに近い雰囲気です苦笑いをする二人。

私は隣と後ろで楽しそうに話す人たちの言葉を聞いていなかった。

舞台は好きだ。

オペラ鑑賞なんていつぶりだろう。

前にオペラを観にいったのは父が生きている時。思えば、あれが家族でどこかに出かけた最期の思い出。

オペラが終わって感動やまない私を急かす母、でも父はゆっくりすればいいと言って母をなだめてくれていた。母も、父がそう言うならと誰も来ないサロンで父に甘えていた気がする。

「ナ、ディアーナ」

「？ あ、ごめんなさい伯爵、なんですか？」

「聞いていなかったのかい？ ローラはこの後、別会場でパーティーに出席しないといけないらしいよ」

「え？ もしかして時間」

「そうね、そろそろ出ないと間に合わないわ。そうよね？」

ローレンシアさんの執事が彼女に向かってうなずく。

「ごめんなさい、ローレンシアさん。私、ぼーっとしてて」

「いいのよ。オペラの素晴らしさを感じてくれていたのでしょ？ この無感動男よりずっといいわ。オルアレンはオペラに誘えば来てくれるけど、楽しんでるのが、いまいち分らないもの」

クスクスと笑って悪戯気にカノヴァス伯爵を見るローレンシアさん。その瞳には愛しさがこめられている気がする。恋人のようで、家族のようで。親しい人に向ける瞳。

伯爵もそれを受けて苦笑を返す。

ふと、ローレンシアさんの表情が明るくなった。

「ねえ。パーティーなんだけど、一緒に来ない？」

「え？」

思いつきなのか、突拍子のない発言に後ろで控えている執事さんと、伯爵の顔が固まった。

ローレンシアさんは私の手を取って名案だと言う。

「社交界の場にあまり出てこないわよね。今日は身内の集まりみたいなものだし、どうかしら。どうせならディアーナにぴったりの男の人、紹介してあげてもいいわよ」

「こらローラ。ディアーナはまだ療養中だよ。それに、私がいるのにどうして他の男性を紹介する必要があるんだい？」

「あなた、自分がディアーナに相応しいと思っっているの？」

「私以外の誰が、この子の隣に立って相応しいというのか、教えてほしいものだね」

本気で分からない、みたいな態度を取らないでほしい。

伯爵以外の人で平凡な人であれば、大概は私の隣に相応しいだろう。

「個人的は執事さんみたいな人がいいです」

寡黙で、冷静沈着みたいなのはわりと好きだ。

私の家にはメイド長はいるけれど、執事はいない。なんでも、母の浮気防止策だったとかなんとか。

「グエン、ディアーナはあなたが好みそうよ」

「もったいないお言葉、痛み入ります」

「……かっこいいなあ」

「………参ったな、目指すべきは彼か？」

「寡黙なオルアレンなんて見ていてもつまらないわ。さ、パーティーに」

「行かないよ」

「あなたには訊いてないわ。どうディアーナ、私と一緒にパーティー

「に行かない？」

美人には免疫があると思っていたけれど、思いなおそう。ローレンシアさんにじーっと見つめられて、私は戸惑う。

母は美人だけれど、それは妖艶だということで、こんな風にじつと相手の瞳を見て誘惑はしない。どちらかといえば燐粉を飛ばして男を誘惑するのが母だ。

「ごめんなさい。私、ローレンシアさんに会うと言って家を出てきたので」

オペラを観ることになったのはローレンシア家でいきなり馬車に連れ込まれたからだ。

そもそも、火傷の治療に対してお礼に出かけたはず。

けど、ローレンシアさんにはオペラを観る予定があつて、私と話す時間がなかった。だから急ではあるけどオペラと一緒に観ないかと誘われたのだ。

馬車の中で。

「そうだったわね。無理につれて来てごめんなさいね。オルアレンが血相変えて飛び込んできた時に抱えていた女の子だったから、どんな子が気になったの」

カノヴァス伯爵には聞こえないように小声で喋ると、片目で軽やかにウィンクして立ち上がり、執事にエスコートされて出口の方へと向かっていく。

「また今度パーティーに誘うわ。その時には来てね？」

「あ、はい！ もちろんです」

社交辞令だとは分かっているけど、嬉しい。

美人に誘われるのは案外気持ちがいいことが発覚した。

「オルアレン、きちんと送り届けなさいね。手を出しちゃダメよ？」

「送り届けることは構わないけれど、手を出さないのは確認できないね。私は恋多き人間だから」

「そう。……恋が多くても本気になれないだなんて、可愛そうにね、オルアレン」

そう告げてローレンシアさんは行ってしまった。私と伯爵は少しの間黙ったまま、どちらも何も言わない。

というより、言いにくい。

ローレンシアさんが最後に放った一言は伯爵にどう届いたのか。笑顔の仮面の下を押し量るすべを持たない私にはどうしていいのか分からない。

ここはやはり、慰めるべき？ いや、慰められても困るだろう。では無視をするべき？ ……それでは私がすごく薄情な人間みたいじゃないか。

別にカノヴァス伯爵に嫌われても構わないけれど、ここから一人で帰されるのは困る。私にも一応矜持がある。劇場から一人で帰るだなんて恥ずかしいことはできない。

機嫌を損ねてもらっては困る。放り出されても困る。でもカノヴァス伯爵と一緒にいるのを他人に見られて嫉まれたくない。

「ダイアーナ、百面相はその辺りにしておかないかい？ コロコロ変わる表情は愛らしいけれど、見ていると面白いよ」

「笑顔を貼り付けている人よりマシです」

「まったく、君といいローラといい、私を一体なんだと思っているんだい？」

「女性なら笑顔で一万人を殺せる伯爵さまでしょう」

「そんなに殺せるのなら、軍人にでもなるうかな。さて もういいかい？」

立ち上がって私の隣に來ると伯爵は眼下を眺めた。もうオーケストラの人も退場し終えて、清掃の人がちらほら見える。

「ここから見える景色が好きなのかい？」

ローレンシアさんが座っていた場所に座り、下を見つめながら問いかけてくる。

伯爵ほど背が高ければ座ったまま見下ろせるのだらう。私は身を乗り出さないと下が見えな……なんだか不公平だ。

「君はどの戯曲が好きなのかな」

「ご自分で調べてはいかがですか？　そういうのを調べるのは得意なんでしょう？」

「君は詮索されるのを好まないと思っていたのだけれど、違うのかな」

「嫌いですよ。必要以上に何かを調べられるのは」

「だから私は君の口からじかに訊こうと思ってね」

手が伸びてくる。頬に触れる。蜂蜜の甘い香りが包み込んで、伯爵が傍にいる。

家で会話する時は、テーブルを挟んで座ることが多いのに。

見上げると、コバルトブルーの瞳に出会う。その瞳が少しだけ、見開いた。

「離してちょうだい、あたしに触れないで！　オルアレンさま、オルアレンさま！！」

「お待ちください、ベルナートさま。サロンにはまだお客さまが」

「あなたは退いてちょうだい。あたしはオルアレンさまに用があるのよ！」

バシン！　と実にいい音が聞こえた。次いで部屋と廊下を仕切るカーテンが引かれる。

見えたのは清楚なドレスを身にまとった、これまた美少女。

横には案内係なのか、ボーイの人が頬を抑えて立っていた。

「アンジェリカ、一体どうしたんだい？」

伯爵は私から離れて、今にも沸騰しそうなほどに怒りきった美少女へと近づいた。

(アンジェリカ＝ベルナート。どこかで聞いた名前ね……。あ、宮廷で噂になっている美少女かしら。たしか、第二王子のセルナンドさまから求愛を受けているとかどうとか……)

メイドが楽しそうに話しているのを聞いたことがある。

大変なんだなー宮廷はと流した話だけれど、彼女がその話題の人なのだろうか。



「その人なの？」

「何がだい？」

「その人のために私とのオペラを棒に振ったの？ あんなヴォカリーズみたいなののために？」

「君は納得してくれたんじゃないやなかったのかい」

「ええ、納得はしたわ。でも、あなたの言う『大切な人』があの子なら別よ。あたしは自分より上の人だと思ったのに、何よあれ」

「なんだかすごい言われようだ。」

あれ、とまで言われたのは生まれて初めての経験。

アンジェリカは私の方へと近づくと私の顎を掴んで品定めするみたいに見てくる。

「あたしより全部下」

彼女の評価はそんなものだった。

カノヴァス伯爵は私に絡むアンジェリカを引き寄せて、恋人同士の甘い語らいの囀 向かい合って抱きしめる を取る。

いきなり抱きしめられたアンジェリカは違う意味で顔を赤らめた。怒りはまだ静まらないように伯爵を睨んでいる。

「彼女はシエラーザの娘だよ」

「あなたと結婚するって言い張っている、あの女の？」

「いずれは親子になるんだ。私にとって大切な人でないわけがないだろう？」

「そうね……本当に結婚するのならね」

抱きしめられていることに優越感を見出したのか、伯爵の胸に顔をうずめながら、勝ち誇ったように笑うアンジェリカ。

挑発的な人だ。自分とのデートがキャンセルされた理由が私だと聞いて乗り込んでくるくらいなのだ、大胆不敵に違いない。

本当はローレンシアさんが呼んだからだけれど、肝心の当人は既に別の場所へと行ってしまっている。

「ディアーナさん、でしたっけ？」

「そうですけど」

「あたしは自分より下の人に自分のモノを取られるのが嫌いなものにつこり笑われる。」

ああいう笑顔には引きつり笑いしか返せない。

伯爵は困ったように微笑むだけで、何を言う気もないらしい。

愛らしい、鈴の音のような声色が耳に届く。

「絶対に許さないから」

ああ、家に帰るのが遅くなりそうだ。

本来痛まないはずの胃が、キリキリと軋んでいる。

伯爵様のお気に入り5（後書き）

ヴォカリーズ（フランス語：vocalise、ドイツ語：Vokalise）

歌詞を伴わずに母音のみによって歌う歌唱法を指す。  
つまるところ、平坦な人という意味で用いています。

2010/03/29

脱字がありましたので修正しました。

## 伯爵様のお気に入り6

せめてもの救いは、伯爵の口が上手いことだろう。

暴れるアンジェリカは、私を家まで送ると言う伯爵についてこようとした。

既にサロンよりホールまで来ていた為か、周囲の視線がこちらに向く。

ホールに展示されているオブジェを見ている通行人を気取りたかつたのに、伯爵はご丁寧にも名を呼んで近づいてくる。

これ以上目立ちたくない。解散すべきだ。そう判断して私は口を開いた。

「ここまで来れば後は馬車を拾って帰れますから、伯爵はベルナートさんとお帰りになってください」

「そうは行かないよ。君はまだ怪我人だ。何が起こるか分からないのに、一人で帰せるはずがないだろう」

いや、一人で帰った方が無事だと思う。

このままだと精神に大ダメージを受けてしまう。

先ほどからアンジェリカが私に寄越す視線の中に、敵意がヒシヒシと込められているのを感じる。

「一人で帰れますから、アンジェリカを送ってあげてください」

「駄目だ。いいかいディアーナ、ここで待っていなさい」

「だから別に送っては」

「ディアーナ」

けして強くないけれど、いつもより幾分と迫力のある声で名を呼ばれ、少したじろぐ。

バツが悪くて視線を上げると優しげな伯爵の顔が見えて、彼の指が頬をゆるりと撫でる。

そのまま綺麗な笑顔が近づいてくるので、とりあえず二歩ほど後退した。

「……どうして逃げるのかな」

「や、綺麗なものが近づいてくると条件反射で」

「綺麗なものならいいじゃないか。キスができないよ？」

「しなくて結構です！」

所考えず大声で返してしまい、自然と顔が赤くなる。

伯爵は苦笑して、唇に指を当て爽やかなウインク。その余波？

に私より後方にいた女性が幾人か倒れたみたいだ。

(……よかった、直視しないで。微笑で人が倒せるとか、半端ないわ)

「ダイアーナ……待っていて」

言って、伯爵はアンジェリカの肩を抱き、馬車乗り場に向かってしまった。

その姿の優雅なこと。

アンジェリカは周囲の視線の中心が自分であることに動揺している様子もなく、目をハートにしている。

やっぱり一人で馬車を呼ぼうか。けれど馬車乗り場は一箇所。同じ方向へ向かうのであればしてしまう可能性が高い。

どこかに都合よく馬車が停まってないか捜すと、眼下に見たことのある顔を見つけた。

(あれは……フランソワ？ 誰かといえるのかしら)

一瞬、バラ園での出来事を思い出して苛立ちを覚えたが、彼の表情が険しいことでそれも収まった。

誰かと口論しているのか、フランソワが問い詰めている。

(意外ね……危機感とか、剣幕とか、似合いそうにない顔なのに)

口論相手は建物の陰になっていて伺えない。

好奇心だろう。少し興味が出て、そちらに足を運ぶと、フランソワたちも動いた。

こちらに気付いた様子はないけれど、足早にどこかへ行くらしい。階段の柱で見えなくなると私は慌てて背中を追った。

階段を降りきると石畳の歩道。正面には噴水があり、その周りで

は貴族たちが優雅に会談している。

(裏手に行くの？ あつちには……何も無いはずなのに)  
音を立てないよう気を配りながら追いかける。途中こけそうにな  
ったけれど、そこは根性で耐えた。

裏路地に回って辺りを見渡す。けれど、街頭のない場所だからか  
暗闇で見えない。

「おかしいわね、こつちに来たと思ったのだけれど」  
月光に照らされて見えるものといえば、他の建物より高さを誇る  
時計塔だけ。

ゆつくりと動きながら辺りを確認する。  
風が冷たくて、木々をカサカサと鳴らす。それだけで不気味な雰  
囲気を醸し出している。

普通、こんな所に女性が一人で来ることはないだろう。私だって  
初めてだ。

帝都の治安は悪くないけれど、犯罪が一切ないというわけではな  
い。日常的に事件は起きるし、事故だって起きている。

(まあ、私は引きこもりだから関係ない！?)  
ふいに、後ろから誰かが私の口を塞いだ。  
手袋をしている手で口と鼻を塞がれ、息が上手く吸えない。その  
まま狭い路地に強引に引きずりこまれる。

こんなところで暴漢にあつてなるものかと、暴れようとして、止  
まった。

知っている匂いがする。

見上げると、見知った瞳が陰しさを伴っていた。

彼の視線は私ではなく、暗がりの中へ。

「ディアーナ、静かにね」

視線を逸らさず、いつもより幾分と声を低めに出して伯爵は一層  
私を抱きしめる。

香りがきつくなって混乱する。

この状況、淑女諸君に見られたら恨まれるに違いない。

「……伯爵」

「しー、大丈夫だから」

なぜ隠れるのかと、問う声は音にできなかった。

誰かが暗がりの中から走ってくる。

その顔は

(フランソワ?)

こちらに気付かず憤慨した様子で去るフランソワ。次に出てきたのは見たこともない男性。

黒いコートの所為か周囲と同化しているようで、異様に鋭い赤の瞳がやけに印象的だ。

彼は気だるげな空気をまとったまま、鋭い眼光でこちらを見た。

(ばれてる!? な、何もしてないわよ?)

一步、一步と男性がこちらに迫る気配に、我知らず伯爵の服を強く握り締めた。

私だって恐怖くらい感じる。見ず知らずの人がガンを飛ばしながら歩いてきたら怖い。

こつり、こつりと踵が石畳を鳴らしながら近づいてくる。

ドクドクと心臓が脈打つ音が鼓膜を震わせて、煩いくらいに聞こえる。体温も上昇しているのか、顔が熱い。

目を閉じてそれらをやり過ぎそうとするけれど上手くいかなくて震える四肢はいうことを利かない。

(こんなことなら、伯爵が寝ている隙に髭でも書いておけばよかったわ! まずいクッキーを食べさせたり、まずい紅茶を出したり、ああもう、なんでもいいから復讐しておけばよかった!)

いつも何かと私のティータイムを邪魔する伯爵に、一矢報いておくんだった。

ふらりと現れて、私の時間を奪って、でも憎めなくて。

どうしてだろう、震えが止まらない。

私は、ああいう瞳を知っている。彼から睨まれたんじゃない、でも人を射殺せそうな瞳、激しい憎悪を伴った瞳を知っている。

あれは、誰から

「……ディアーナ、行ってしまったよ」

「え？」

目を開けると景色が飛び込んできて、ふわりと、伯爵が己のスカーフを私の首に巻いてくれた。

手袋を外し、素手で頬に触れてくる。

さらり、さらりと意識を確かめるように触れ、掌で頬を包み込まれる。その温かさに、自分の頬の冷たさを知った。

「私にまずいクッキーを食べさせるだなんて、いけない子だ」

「ど、どうして」

「口に出していたよ」

苦笑して、長い指が髪を梳く。数秒呆然とした後、周囲を見渡し、みるけれど、黒いコートの男性はいない。

「もう、大丈夫だよ」

伯爵の瞳と口調。それが確認できると、肩から力が抜けたようで、大きな呼吸ができた。

密着しすぎだとも思っけれど、目の前の人を手放すことはできない。

「伯爵……」

「ん、なんだい？」

笑顔だ。綺麗な顔だ。綺麗な顔すぎて鳥肌が立つ。

怖かったとか、混乱するとか、そんなのがどうでも良くなるくらいに綺麗で。

だから。

「とりあえず髭を書かせてください」

「……駄目」

拒絶されてしまった。もし次に危険な目に遭っても心残りがないようにと提案してみたのに。

タイミングをなくす前にと掴んでいた服を離すと、なぜかその手は伯爵に捕まる。



離してほしいと目線で問いかけても受け入れてもらえず、大きな温かい手が私を引っ張る。

「帰ろうか、ディアーナ」

伯爵は歩き出した。

裏路地から表通りへと、街頭があるだけで恐怖心も髓分と薄らぐ。人気は少なくなっているけれど、まだちらほらと貴族の姿が見える。

「伯爵、さっきの人は。それに、どうしてあそこに」

「話は馬車の中で、ね。クラウス！」

「およびですかー、旦那さま！」

伯爵が柄にもなく大声で呼ぶと、遠方にいた従者は走ってやってきた。

背の小さい　　と言っても、私より大きいが　　少年だ。

「うちの馬車に、ここまで来るよう言ってくれ。傍に止めてあるはずだから」

「はい！　畏まりました。少々お待ちください！」

元気よく答えると従者の人は来たときと同じように、走りながら去っていく。

私は当然のことながら異論を唱えた。

「普通の馬車で結構です。家に帰るだけなので」

「おや？　違うよ、ディアーナ。君が帰るのは私の家だ」

何を言うのだ、と表情に出ていたのだろう。

「わ、私は家に帰りま　　」

指が私の唇に触れる。それだけで喋るのを止められてしまう。

ああまずい。先ほどご婦人方を倒した笑顔が私のほうを向いている。

はにかまないでほしい。背中がむずがゆくなる。

ちらりと見てみると、やはりこちらを向いて笑顔の攻撃をしてくる。

彼にあんな顔をさせておいて、誘いを断るのは至難の業だろう。

けれど絶対に嫌だ、カノヴァス伯爵の家に行くなんて。

鳥肌どころか、全身の毛が逆立ってしまうかもしれない。

「ディアーナ」

「い、家に帰ります」

顔を見なければ断れる　はず！

「……ディアーナ」

「そんな風に言っても駄目です！」

手は繋がれているので逃げられない。

お願いだから、切なそうな声なんて聞かせないでほしい。

わがママを言っているのは伯爵なのに、私が悪いことをしている気分になる。

「ディアーナ」

三度目、伯爵が私の名を呼ぶと同時に地面から足が離れた。

ゆるやかに、けれどけして強引ではない動きで私を抱き上げる伯爵。

いつの間にか馬車がこちらに向かってきている。

伯爵の前で停車した馬車の扉が開く。

「タイムオーバーだよ、お嬢さん」

## 伯爵様のお気に入り7

車輪がカラカラと石畳を鳴らす音を聞きながら、私は目の前の御仁が腹を抱えている様子を眺めていた。

もちろん、彼が腹を抱えている理由は腹痛だとかの類ではない。

息を吸っては苦しんで、手は膝の上。拳が小刻みに震えているのは見間違いないだろう。

「いつまで笑っているつもりです」

「いや、うん、すまないとは思っているんだが」

綺麗な伯爵は腹をよじって爆笑中。原因はもちろん私。

「伯爵があんなキザなセリフを言うからです」

「本当に髪の毛が逆立ったね。あのときの君の顔……いや、可愛いよ」

「そんな風に可愛いと言われても嬉しくありません」

馬車に乗り込む際に言われた台詞に、すっかり全身の毛が逆立ってしまったのだ。

いきなりあんなセリフが聞こえたら、脳味噌も活動を停止したくなるのだろう。

脳は一切の外部音を遮断し、私を現から遠ざけた。そしてその間、意識も飛んでいたのか、気がついたらいつの間にか馬車の中。

走行してしばらく経つ馬車から降りるとは言い出せず、目の前の

御仁は笑ったまま、私は不機嫌絶好調。

「そんなに怒らないでくれないかい。ほら、もう笑わないから」

と言っても笑いが収まっているようには見えない。

まあ、別に笑われてもさほど気になる性質でないので、息を吐いて諦めた。

「もういいです」

外はすっかり闇にのまれており、夜の遅さを知らせてくれる。

街頭は点在するけれど薄暗く、一人で歩けば闇に飲み込まれてし

まう、そんな感覚に陥る。

「伯爵、さっきの人は誰だったんですか？」

「さっきの人？」

「黒いコートの人です」

暗がりの中、赤い瞳。

憎悪のような、殺意のような、絶対的な嫌悪の瞳。

なぜ睨まれたのか分からない。そしてああいう瞳をどこで見たのか、思い出せない。

伯爵を見つめると彼は柔らかかそうな髪をふわりとかき上げて、

「さあ、そんな人は見かけなかったな」

そうのたまった。

意外な返答に私は身を乗り出して問い詰める。

「いたじゃないですか！ 赤い目の。馬車の中で話してくれるって」

「話しているじゃないか。君と私は」

「そうじゃなくて、あの男の人のことについて」

「目の前に私がいるのに他の男性の話を持ち出すなんて。いけないね、ディアーナ。嫉妬してしまうよ？」

先ほどのことが、なかったかのように伯爵はとぼける。

彼のことを隠す必要のあるのだろうか。それとも単に伯爵も知らないだけなのか。

見やっても、整った顔から真意を汲み取ることはできない。それどころか嬉しそうに視線を返される。

「じゃあ、どうしてあの場所にいたんです？」

「待っていてとお願いをした場所に、待ち人がいなかったから心配になってね。ああ、アンジェリカはきちんと馬車に乗せたから大丈夫だよ」

「……私ごと狭い通路に入る必要は？」

「ロマンティックな雰囲気が出るかと思ってね」

どこの世界に、暗がりの狭い路地でロマンスが生まれると言うのだろうか。

心寄せ合う男女間なら親密なムードになるかもしれないけれど、私と伯爵の間ではそんな奇行はおき得ない。私が鳥肌を立てて終わるだけだ。

伯爵は数秒黙り、窓の外を見た。

端正な横顔。遠くを見る瞳に言葉をかけていいのか迷ってしまう。この人が私を見ているときには話もできるけれど、視線が余所を向いた途端それができなくなる。

「君はどうしてあの場所にいたんだい」

「え？」

「どうしてあそこにいたんだい？ 私は待つていてと言ったのに」怒っているのだろうか。声色に変化はないけれど、問い詰められているようで居心地が悪い。

約束をした覚えなんてないし、勝手に告げていなくなったのは伯爵の方だ。

だから私が罪悪感を覚える必要なんてない。

「知り合いがいたので追いかけただけです」

「それだけかい？ 一人で帰ろうとしたんじゃないんだね」

一人で帰ろうとも思っただけれど、同じ方面に向かうのであればれると断念したのだ。では伯爵と帰るつもりだったのかと考える。

(だったら、言いつけの場所にいないと不便よね)

どうして動いたりしたんだろう。

「フランソワがいたので追いかけたんです。口論しているみたいだったから」

「では、私が君を見つけれなかったら、どうしていたんだい？」

伯爵が私を見つけれなかったら？ あの怖い思いを一人でしていたでも、そんな考えは頭になくて。勝手に行動をしたのは……

「伯爵なら見つけてくれると思ったので」

ぼつり、と呟いた言葉に伯爵が目を丸くした。

滅多に見られない驚いた表情に、こちらまで唾然としてしまう。

伯爵は窓のふちに肘をつき、頬に手を添えて苦笑する。

「すごい口説き文句だね。嬉しいよ」

「誰が、いつ、あなたを口説いたんです」

「違うのかい？ 君があ場所を離れたのは、どこにいても私が君を見つけると、そう確信していたからだろう？」

「それは」

「違う、と言い切れなかった。」

「けれど、自分がそんな乙女チックな思考をしているとは認めたくない。」

「あなたなら女性の居場所くらい分かるでしょう。私じゃなくても、どんな女の人でも」

「そんな特殊な能力は持っていないよ」

「嘘ですよ。だったらどうして私の居場所が分かったんです？ 表通りじゃなくて裏路地にいたんですよ」

「うーん。愛のなせる業、かな」

「至極当然に言われ、数秒固まった後、私の肌がとんでもないことになったのは 言うまでもないだろう。」

洒落た門をくぐり、左に折れると巨大な石柱で支えられた通路がある。幅だけでも私の身長を六倍したくらいあって、なんとというか、壮大だ。

その先には小さな扉。たぶん屋敷内に繋がっているのだろう。

「どうしてこんな所から入るんです？」

「玄関ではない場所から、まるで泥棒でもするかのように入る理由はない？」

「しー！ ですよ、ディアーナさま。ステイファンさまに見つかります」

「ステイファンって、誰？」

「私の執事だよ。とてもこわーい、ね」

「ですから大きな声は駄目です」

クラウドが分かりやすくバツテンのポーズをとる。

伯爵は神妙な顔で頷き、やや緊張気味に扉を開けた。家に入るだけなのに、何故牢獄から脱出しているような雰囲気になっているのだろうか。

小さく扉を開くと室内の明かりが零れてくる。その僅かな隙間から中を除き見て頷くと伯爵は扉を開けた。

その先には

「お帰りなさいませ、坊ちやま」

「!?!」

扉を開けたその先には、老齡な執事さんが仁王立ちでいた。

その人は私、伯爵、クラウドをそれぞれ見るとすっと目を細める。伯爵は苦笑いをして手を振るが、執事さんは無表情。クラウドにいたっては全身が震えている。

「……坊ちやま、ついに犯罪まがいな行為を……婦女子を誘拐とは、このステイファン、嘆かわしいかぎりにございます」

執事さんは、胸元から白いハンカチを取り出し目元を押さえ、涙を拭うマネをする。勿論、涙など一滴も出していない。

伯爵家の人ということもあってか、一癖も二癖もありそうな人だ。「ステイフ。人聞きの悪いことを言わないでくれないか。ディアーナはシェラーザの娘だよ」

「……ロリコンですか？ そちらも立派な犯罪でございますよ」

「知っているよ。というより、私とディアーナはそんなに年も離れていない。ロリコンだなんて事実無根だ」

本気に近い真面目な顔で伯爵に迫る執事さん。

伯爵は遺憾だといわんばかりに弁解する。そして私は、

「伯爵……ロリコンだったんですか」

感想を述べた。

「こらディアーナ。悪乗りしない」

「ともあれ、お帰りなさいませ。お帰りが遅いので心配で心配で、じいの小さな胸が張り裂けそうでしたよ」

伯爵の手を取って切なそうな顔をする。

手を取られている伯爵は笑顔だ。いや、だんだんと笑顔が笑顔じゃなくなっている。執事さんがギリギリと伯爵の手を握っているのだ。

「ステイフ、手が痛いよ」

「痛くしておりませゆえ」

「すまない、帰りが遅くなってしまつて。許してほしい」

「愛する主のすることを、わたくしが制限するはずありません。ですが」

言つと執事さん伯爵を掴んでいる手と反対の手で、存在感を消していたクラウスの襟を掴む。

「従者の規制は私の管轄内です」

「ひえ！？ ごめんなさい、ごめんなさい！ 逃げようとしてすみません」

「クラウス……お客さまの手前、みつともない真似は慎みなさい」

「は、はひー！」

既に半泣き状態のクラウスは救いを求めるように伯爵を見やる。

そうすると伯爵は私を見て、

「クラウス、ホットミルクを二つ、応接間に持ってきてくれないかい」

そう告げた。

命を受けるとクラウスはじたばたともがき、執事さんの手から逃げて脱兎のごとく駆け出してしまふ。

そんなに怖そうな人には見えないのだけれど、やはり下の人にとつて上司は怖い存在なのだろうか。

「ステイフ、クラウスに怖がられているよ」

「わたくしは至つて普通に接しております。それよりも」

執事、ことステイファンさんは扉をきちんと開けて恭しく礼をする。

皺の入った手は大きくて、いかにも仕事人という感じだ。



「いらつしやいませ、ディアーナさま。わたくし、カノヴァス家の執事長を勤めておりますスティファンと申します。どうぞお手を。ご案内いたします」

先ほどまでの様子を一变し、実に礼儀正しい態度で手をとられる。だから、できれば帰りたい、という言葉を発することはできなかった。

## 伯爵様のお気に入り 8

「こちらにお掛けください」

ソファを勧められ、腰を下ろす。

応接間なのか、弾力性に富んだソファが数脚と丸テーブルが二つ。窓からは伺えないけれど外は庭なのだろう。さわさわと草のこすれる音がする。

橙色したランプの灯り。ゆったりとしたその色は必要以上に存在を誇張しない部屋に実に適していた。

家具は多くないけれど、各々にある拘り。けして押し付けではない上品さは、ここが伯爵邸であることを思い知らせてくれる。

「して、ディアーナさまは何ゆえお越しに？」

「伯爵に誘拐されました」

「……坊ちゃま」

「違う！」

じとめで見られ、伯爵は訂正に入る。

いつも取り澄ました表情だけに、彼が色んな顔をするのは珍しい。

私といるときには見せない顔。やはり心許せる人が傍にいと違うのだろうか。

「不快な思いをしておりませんか？ もし坊ちゃまが不貞を働くようなことがございましたら、このステイファンにお申し付けくださいませ。きちんと教育しますので」

「はい、ありがとうございます」

伯爵は何か言いたげに口をへの字に曲げるけれど、ステイファンさんは華麗に無視。

そうしても空気が悪くならないのは一重に、彼らが信頼という絆で結ばれているからに他ならないだろう。

羨ましいなと、少しだけ思った。

私は一人っ子だし、生まれてこの方、友人というものを持つたことがない。

絆で結ばれる相手もいなければ、悩みを相談する相手もない。メイドは皆親切だけど、仕事が忙しそうだし、迷惑はかけられない。となると自然に一人でいるようになって。今では一人の方が楽だとさえ思っている。

「旦那さま、ホットミルクをお持ちしました」  
トレイを持ったクラウスが入ってきた。

「ああ、ありがとうございます」

「かしこまりました。熱いのでお気をつけてくださいね」

カップが二つ目の前のテーブルに置かれる。

ふんわりと甘い香りを漂わせるソレ。

柱時計を見てみると、既に長針が21を回っていた。

「私は少し用があるから失礼するよ。クラウスはディアーナと一緒にホットミルクを飲むように」

「はい！……え？」

「飲み終わったらディアーナを部屋に案内してあげてくれ。今日はそれであがりだ」

言ってクラウスの戸惑いを横目に、伯爵はステイファンさんを連れて部屋を出て行ってしまふ。

その際、こちらに一瞬たりとも視線が向かなかった。

……やはり、おかしい。

たとえ不機嫌であっても、伯爵は客人をないがしろにするような人ではないはずだ。

先ほどのぐらかしといい、私をここに連れてきたことといい、今日の伯爵の行為には引つかかる点が多すぎる。

何かを隠している。それは分かるけれど。

(問いかけて、いいことなのかしら?)

できれば関わりたくない。

見ず知らずの場所で、私に関わることなく、つつがなく、滞りな

く終わってほしい。

けれど、伯爵が敢えて口を閉ざしたのだとすれば、嫌な予感しかない。

いや、伯爵がらみでいいことなんて、あつたためしがない。

「……ディアーナさま。どうかしましたか？」

考え込んでいた所為か、クラウスが心配気にこちらを見てくる。

なんでもないと笑顔を見せると、同じように微笑んでくれる。

いい子だ。私より大きいけれど、そこが少しだけ気に食わないけれど、伯爵なんか目じゃないほど素直でいい子。

「ねえクラウス、私、家に帰っちゃ駄目かしら」

「だ、駄目ですよ！ 今日はこちらにいてください！」

「馬車はあるんでしょう？」

「で、ですけど！」

慌てたようにクラウスは立ち上がり、おたおたしだす。

視線はさ迷い、私にどう言おうか考えているのだろう。

純粋な子を騙すようなマネはしたくないのだけれど、私だって理由も分からず留まることなどできない。正当な理由もなしに、拘束される義理はないのだ。

「お願いですから。その、家に帰るなんて言わないでください。旦那さまはディアーナさまのことを思って、こちらに連れてこられたんですから」

「そう言われても、家に連絡もしてないし」

「大丈夫です、連絡なら入れてあります！」

「入れて、ある？」

声色が少しばかり低くなったかもしれない。

立ち上がってクラウスに視線を送ると彼はしまった、という顔をしました。

本当に素直な子だ。素直で分かりやすい。

両手を世話しなく動かしながら、懸命に説得を試みているけれど、声色が落ち着かない。それは彼自身が動揺しているという

証拠に他ならない。

「私がこちらに来るのは急に決まったことよ。いつ連絡をしたの？」

「それは、その……旦那さまにお伺いしないと分からなくて」

「だったら伯爵を呼んできて」

「む、無理ですよ！ どこにいらっしやるかも分かりませんし」

「そ、なら勝手に帰るわ。連絡ができないなら、私が帰ったことまばれる心配ないだろうし」

「そんな！ ほ、ほら、もう夜も遅いですし。それに、お一人じゃ危険です！」

「私はか、え、る、の！」

私を止めようと近づいてきたクラウドを押すと、彼はいとも簡単に退いた。

それだけならよかったのだけれど後退した際、傍にあつたテーブルに躓きバランスを崩し、テーブル上のカップごと豪快に転んでしまふ。

まるでコメディのような展開に私はしばらく目を点にしてしまった。

純粹なだけでなく、ドジっ子要素まで持っているとは……流石、伯爵の従者。

「大丈夫？」

「だ、大丈夫、です！」

「情けないわね。ほら」

手を差し出す。

その手を取ろうとしたクラウドは、腕が袖から覗くと顔色を変えて手を引っ込めてしまった。

どうしたのかと眉をひそめると彼の腕、袖元に隠れるようにしてある印に視線がとまる。黒く、皮膚を焦がして付けるその印は咎人の証。

しばらく、気まずい沈黙が場を支配した。

咎人の烙印など、見られて喜ばしいモノではない。むしろ是が非

でも隠さなくてはいけない類のものだろう。となれば、ここは見なかつた振りをするのが一番。

そう判断すると私は差し出していた手をさらに伸ばした。

「ほら、いつまで尻餅ついてるつもり？」

「え、あの」

「服が濡れちゃったわね。ミルクだから早く洗濯しないと」

「ディアーナさま」

「なに？」

「……あの、僕の腕の　その」

上目遣いにこちらを見る瞳。しかし悲痛さを帯びた顔は私を捉えるとすぐに俯いてしまう。

咎人はすべからず下賤である。奴隷よりも格が下な彼らは人として見なされることがなく、主に兵力や最悪その肉片を肥料として使用される。いわばモノ。

咎人と口を聞くこと、触れることは禁忌であり、最も汚らわしい行為との認識が一般的にある。

けれど、咎人が何だというのだ。ここには私とクラウドしかないのだから、私たちが黙っていれば誰にもばれない。

「あの」

「印があるからって、どうなるわけでもないでしょ。というより、いつまで私に手を差し伸べさせるの？」

「あ、すみません！」

私の手は取らず、視線も合わせないで立ち上がるクラウド。

その手をわざと掴んでみた。

驚きでやっとぶつかる視線。ともすれば泣き出しそうな表情。そんな顔をする必要などないのだと、私に彼を慰めることはできない。伯爵ほど話術に長けていればスマートに慰めることも、場を明るくすることもできるのだろうけれど、私にはそんな器用なマネはできない。

ただ手を掴んで、相手を困らせるだけ。

「だ、駄目ですよ、ディアーナさま、僕に触れたら汚れます」

「もう触れてるわ」

「お願いです、離してください！ 印を見たのでしょ。だったら  
「だったら、何？ 私には触れられたくない？」

もしそうなら少しシヨックだ。

クラウドは首が取れるのではないかと思えるほど首を振り、否定  
を表してくれる。

そうしてくれるということは、嫌われてはいないのだろう。

「離したら逃げる？」

「……逃げません」

「私に手を繋がれているのは嫌？」

「いやじゃ、ないです」

「なら『触るな』なんて言わないで。そんなこと言われると傷つく  
わ」

伝わるか分からないけれど、上手く言葉にできないのだから、自  
分の思いつけるだけの言葉で、触れてもいいのだと告げてみる。

するとクラウドの頼りない笑顔が見えて、それに安堵する自分が  
いた。

## 伯爵様のお気に入り9

咎人。

昔、人と奴隷が身分的に大別されていた時代、奴隷よりも更に格下である存在を人は咎人と呼んだ。

咎人とは主に大罪を犯した輩の総称で、彼らは人間として認められない。人間という枠からはみ出した別の何か。昔の人はそう考えたそう。

咎人の仕事は主に死刑執行。簡単に言えば人を裁くとき、首を刎ねる役割を担うモノのこと。

他には戦場での死体片付けや汚れ仕事など、人徳ある人種が嫌悪し、携わりたがらない行為を引き受けるのが彼らの役割。

奴隷制度が廃止された現在では、咎人＝罪人、という定義はだいぶ払拭されつつあるものの、根付く残る負のイメージは簡単に拭えない。咎人と聞くだけで汚物を見るような反応をする人もいる。

「だからどうしたって言うのよね」

ベッドに寝転んで私は枕に頭をつけた。

あの後、流石に家に帰る云々の話をする気にはなれず、半泣きのクラウドに連れられて部屋に案内された。伯爵の世話になるのは嫌だったけれど、気まずいまま退散もできないし、結局泊まることになってしまったのだ。

色々と腑に落ちない部分はあるけれど、伯爵を後で問い詰めればいい。

今のクラウドを不用意につつくのは良くない。それが私の判断だ。「はー、引きこもりの生活に戻りたい」

伯爵と出会ってから目まぐるしく周囲が変わっている気がする。それがいいことなのか、悪いことなのか分からないけれど、息づく暇がない。

こんな生活を送るなんて夢にも思っていなかった。



代わり映えのない毎日が泰然とそこにあつて、繰り返される日々の中に私は埋もれているのだと、そう思っていた。

「誰かが動けば波紋は起きる、わよね」

その誰かが私であっても、水面に小石を投げ入れると波は立つ。いかに些細な波紋であっても、それはどこかで誰かを、何かを動かすきっかけになってしまう。

波を起こさないように、誰にも影響を与えないように生きることなんてできない。

波紋が起きれば傷つき悲しむこともあるのだろう。喜びや嬉しさも当然、誰かの起こした波紋によつてもたらされる。けれど、でもだとしたら、私は波紋が起きない場所にいたい。

不幸の波が強すぎて立ち直れないのだ。その先にたとえ望むべき未来が待っていて、怖い

波紋を受けない場所にいれば傷つくことも悲しむことも、誰かを失うことだつてない。ただ、一人であるだけ。

ぎゅっと胸の辺りが苦しくなった。

一人であることには慣れたはずで、他人の介入が煩わしくさえ思っている。けれどなぜだろう、一人であるときの自分を思い描けない。

蜂蜜の香りをまとう誰かが、私に手を伸ばしてくるからだろうか。

「……伯爵の所為よ」

そう呟いて私は目を閉じた。

子守唄が聞こえる。

あれは、誰が歌ってくれたものなのだろう。

黒い扉があつて、その中にはベッドに横たわる父の姿。すぐ傍には医者。母は悲痛な顔で父に縋っている。

私は、どこ？

私の居場所はどこ？

ポツリと空いた空白の場所。私はそこにいたのだろうか。  
父が弱々しく目を開き、母の頬を撫でる。そのまま空白の場所へ  
伸びた手が何かを掴んだ。

ソレは、私？

誰か教えて。お願いだから答えて。私はどこにいれば良かったの？

あの時、父が弱つていくその中で、何をすれば良かったの？

この手は、あの温かくて大きな手を掴み返せば良かったの？

誰か、お願い、答えを教えて。

誰か、お願いだから、私の居場所を 教えて。

「ここにいればいいよ、ディアーナ」

心地よい声色が耳に届くと、私の視界は光を映した。

「約束をしたから」

徐々に広がる明るさと、ぼやける視界。

目の前にはシーツがあつて、なぜか私は伯爵に抱きしめられてい  
る。

ちなみに、ここはベッドだ。私に用意された部屋だ。間違つても  
伯爵の自室とかではない。

「伯爵、どうしてここにいます？」

「うん？ 君の顔が見たくなつてね」

「紳士がすることじゃありませんよね」

「そうだね」

と言いながらも伯爵はベッドから起き上がる気配を見せない。

陽光がキラキラと室内に眩しさを運んでくる。

少し開いた窓から涼やかな風がカーテンを揺らし、伯爵の髪をな  
びかせた。

朝っぱらから、どのような理由でこんなにも煌びやかなモノを見  
なくてはいけないのだと神様を少しだけ呪ってみる。

「退いてください、もう起きますから」

「もう少し、このまま」

駄々っ子がシーツを引つ張りながら言えば可愛いだろうけれど、余裕しゃくしゃくな顔で言われても困る。

というよりも、なぜ私は抱きしめられているのだろうか。

「貴方の部屋は違う場所でしょう。勝手に私用のベッドで寝ないでください。あと、乙女の部屋に無断で入るとはどいうつ了見です」

「うん、すまないね」

「すまないって……」

謝られるとは思ってなかったので言葉に詰まる。

いつもなら皮肉の一つくらい返してくるのに、今は私を抱きしめるだけ。

何かあったのかと問いかけるべきなのだろうか。それとも単に私をからかって遊んでいるだけ？

「ディアーナ」

寝そべったままの伯爵は心地の良い声色で私の名を呼ぶ。

男性の顔をまじまじと見るのは褒められた行為ではないだろう。

けれど不幸なことに、私にはその機会が幾度となく与えられている。

詩人なら彼の顔をアポロンの奇跡だとか称すのだろう。コバルトブルーの瞳が嬉しそうに細められ、形の良い唇が弧を描くと白い歯が覗き見える。

「ディアーナ」

私の名前を呼ぶ声は彼のもので、呼ばれる度に、ここに自分がいるのだと信じられる。

「私の居場所は君のいる所だよ」

「……はい？」

何を言い出すのだろう。筆筒の角にでも頭をぶつけてきたのだろうか。

視線が合うと無駄に微笑まれるので、私は体を起こした。伯爵は私起き上がることを邪魔しない。

「こつというのもいいね。好きな人の傍でなんでもない時間を過ごす

のは」

「ここにいるのが本当に好きな人だったら良かったですね。ご愁傷様です」

「つれないね、君は」

「暇な人ですね、伯爵は」

ベッドに横になっっている伯爵を、私が上から眺めている。

ふと、いつだかこんな風に見た覚えがあるような気がした。けれど思い出せない。

幼いときの記憶だろうか。

記憶を辿ろうとしたまさにその時、コンコン、と軽いノック音が聞こえた。

「ディアーナさま、起きておられますか？」

「クラウドス？ 起きているけど」

「あの、昨日のこと、僕混乱していて、その、あの……好きだって言ってもらえて嬉しかったです。それで……僕、頑張りますから。もしご用がありましたら是非お声がけください。えっと……それだけなので。し、失礼します！」

扉も開けず言いたいことだけ言って、走り去ったようだ。扉を開けなくても容易に想像ができてしまう、きっと顔は真っ赤だったのだろう。

「が、私は拒絶されると傷つくとは言ったけれど、好きだと言っただろうか。」

記憶が混濁していて、いまいち思い出せない。

少しばかり唸りながら考えていると、暇な伯爵が私の腕を取った。

「クラウドスのことが好きなのかい？」

「……は？」

「クラウドスに好きだと告げたのかい？」

起き上がり、実に真面目な顔で迫ってこられる。

起きぬけの人に綺麗な顔を近づけてはいけないと、人生のどこかで習わなかったのだろうか。

……心臓に悪い。

「拒絶されると傷つくとは言いましたが、好きだとは……言っていない気がしますよ」

「昨日、何が？」

昨夜のこと、主人である伯爵がクラウスの咎人印を知らないはずもないので正直に話した。

ベッドの上で男女が向かい合いながら、なぜこんな話をしなくてはいけないのだろうか。

「なるほど、クラウスの秘密を知ってしまったんだね」

「白々しいですね。隠す気があったなら、私の前に彼を連れてこなかったでしょう」

「そんなことはないよ。ばれるだなんて思ってもいなかった」

咎人だと知っていて、それでも伯爵はクラウスを雇っている。

これが世間に露呈すればただ事ではすまないだろうけど、この人なら多少の不祥事は軽くすり抜けられる。そう思えてしまう。

困難をなんてことはないといった顔して終わらせて、きつと無駄に綺麗に微笑むんだろう。

これで女性への火遊びを程々にすれば、きつと、もっとモテるのに。

「でも、ばれたからには秘密にしないといけないね。私と君の」

「私とクラウスの秘密です。伯爵は混ざらないでください」

しばしの沈黙。

「……私も知っている秘密だから、三人の秘密にすれば」

「伯爵が今このときをもってクラウスの過去を忘れれば、私とクラウスだけの秘密になります。さあどうぞ、忘れてください。綺麗さっぱり」

二人だけの秘密、ならまだいいけれど、伯爵が入るとややこしそうなので省いておきたい。

と思ったのだけれど、目の前の男性は本気で悩んで、眉を寄せながら首を捻って、ふるふる頭を振ると私を見て、

「私も混ざりたい」  
そう告げた。

……この人、本気で悩んだ？  
本気で悩むことだったのだろうか。

しかも、混ざりたいと。自分が入れてもらおう立場だとも思っているのだろうか。

強気に出れば私もクラウスも伯爵に反論なんてできないというのに。

「入ってこないでください。私のために」

「君のために？」

「二人だけの秘密だから面白いんじゃないですか」

こう言えば、きつと無理強いはしてこないだろう。記憶の消去は不可能だとしても、意固地になって三人の秘密にしよう、となど言わないはずだ。

カーテン越しに朝日を見ると少しだけ心が弾んだ。

起床時刻は既に過ぎている。流石にベッドから降りようと体を動かすと伯爵に腕を引かれ、頬に温かいものが触れた。近くに来た所為で、伯爵の蜂蜜の香りが一段と濃くなる。

「じゃあ、これは私と君だけの秘密だね」

唇に手を当てて、したり顔の伯爵がベッドから立ち上がる。

私は頬を押さえて、今、なにが起きたのか脳内で整理をしなくてはいけなかった。

「これが真正正銘、二人だけの秘密だよ、ディアーナ」

こちらを見て伯爵は意地悪く微笑。

それが癩で、なにやら恥ずかしさも、腹立たしさも入り混じって手元にあった枕を投げつけた。しかし枕は彼の横を通り過ぎる。

「な、なに、いきなり何するんですか！！」

「おはよしのキスを」

「勝手にしないでください！」

「今度からは了承を取れと？」

「今後はしないでください！」

「それは……ムリかな」

「ど、うして」

「私は君が好きだから、こっちを向いてほしくなるんだよ。クラウスを見ないで。他の人は見ないで。秘密なら、私と作ればいい」

ぷちんと、私の中の何かが切れた。

綺麗なものを我慢するパラメータが振り切れでもしたんだろう。

腕を伸ばして届く範囲にある花瓶を持ち上げて、伯爵を睨む。

……朝から、伯爵邸は騒がしかった。

## 伯爵様のお気に入り10

なぜ安らぎの時間を削られるのだろう。至福の時間を好きに過ごしていたいだけなのに。

誰だって自由な時間は好きなことをしていたいはずだ。

わざわざ好んで問題ごとや厄介ごとを絡めたいと思う人はいない。いや、そういう物好きな人はいるかもしれないけれど、私は違う。

お茶の時間はゆっくりと過ごしたい。一人でゆったりとくつろぎたい。

問題ごと、厄介ごと、面倒ごともお断りだ。特に伯爵とか、伯爵とか、伯爵とか。

人を揶揄して遊ぶのもいいだろうけれど、もっと彼は自分の時間を有意義に使うべきだ。

私をからかって鳥肌立てさせる時間があるのなら、無駄にある能力を活かして帝都に貢献すべきだろう。

まあ、今日は伯爵がいないので、ゆったり過ごせる。

と思っていたのに……なぜ。

「聞いているの、ディアーナ！」

ズイっと、テーブルから身を乗り出すアンジェリカ。

癖のある栗毛がふわりと風に揺れ、弧を描くように宙を舞うと肩にそっと戻る。

「聞いているわ、アンジェリカ。でもね、どうしてここで」

「どうすればオルアレンさまはあたしになびくと思う？」

私の言葉……無視ですか？

「顔よし、頭よし、器量よしのあたしなのに、どうしてオルアレンさまは振り向いて下さらないの？」

ふて腐れるとガーデンチェアに深く座り、アッサムティーを口にするアンジェリカ。白い肌に柔らかな素材のドレス。本当に、見た目は愛らしい妖精のようだ。



ぱつと見、すごく清楚で、口を開かなければ大人しい少女に見えるだろう。

大きな瞳と桜色の小さな唇。世の男性たちが騒ぐのも仕方がないと思ってしまう美少女。なぜ彼女が我が家にいるのか、それは私にもよく分からない。

母に伯爵との関係について問いただそうと来訪したらしいのだけれど、母が面会を断つたらしい。で、帰り際、たまたまガーデンでティータイムをしていた私に出会ったのだ。

気分転換のつもりで外に出たのがいけなかった。そしてアンジェリカの迫力に負け、誘ってしまったのがやはり敗因だろう。

木陰から陽光がちらちらと伺える光景は素敵だけど、できればもっと静かに過ごしたかった。

「伯爵、この頃は女遊びを控えているそうよ。ディアーナ、あなた何か伯爵に言っただ？」

「どうして私に訊くの？」

「だって、今伯爵が落とそうと狙ってるのは、あなたなんでしょう？」

「……何、それ」

「噂になってるわよ、結構」

嘘だ……。一生涯の恥になりそうだ。

婚約している男性が口説き落とそうとしているのは婚約者の娘だなんて。世間にはいい笑い物だろう。

「最悪」

「どうしてよ、オルアレンさまに構ってもらえるのに」

「構ってほしくないわ。私をからかって遊んでるだけだし。アンジェリカこそ、カノヴァス伯爵のどこがいいの？」

「オルアレンさまのいいところ？ あげればキリがないけど」

「できれば完結に説明してほしいんだけど」

「そ、ねー」

白いティーカップの中身をゆらゆらと揺らしながら考えるアンジ

エリカ。私も自分のティーカップへ手を伸ばす。

「だって、自分を作らなくていいもの」

「？」

「オルアレンさまって、彼自身が結構ひどい性格でしょう？ 女を

ポイ捨てするし、平気で何人も女性の女性と付き合うし、嘘つくし」

「それはあの人のムカつくところですよ」

「そうだけど。でも逆にそれだけ見せられちゃったら、こっちも少しくらいいいかなって思えるのよ。ほら、あたしって見た目がすごく美少女じゃない？」

「自分で言う？」

「言うわよ、事実だから。でね、こんな姿だから馬鹿な男がわんさか寄ってくるのよ。『お淑やかにしなさい』とか言われたり、『アンジエリカはこういう女性だから』とか噂されたり……。はつきり言うわ、それ、ものすごく腹立つの。あたしは何？ 本物のあたしがどんなのか見たこともないくせに、勝手にあたしの理想像を作って崇めて、実物にもその理想を押し付けようとする。もう本当サイアク。あたしがそれに近づこうとしてしまうからもっとサイアク」

理想に近づきたくないのなら近づかなければいいのとはは、社交界に出ない人の言葉だ。

良くも悪くも地位があれば世間体を気にしなくてはいけなくなる。想像されていれば想像どおり、もしくはそれ以上でなければ周囲の興味はたちまち胡散する。それが貴族の社会だ。

「着飾るのは好きだし、ちやほやされるのも嫌いじゃないわ。でも必要以上にしたいと思わないの。だから、悪人を好きになれば自分を作る必要がなくなるじゃない？」

「つまり、カノヴァス伯爵相手なら遠慮しないで自分を出せるから、彼を自分になびかせたいの？」

「そうね。それもあるわ。でもほら、オルアレンさまは欠点があっても、見た目ばっちりでしょ。隣にいるだけで華になるわ」

想像もできない。

アンジェリカの言いたいことは分かるけど、その相手にカノヴァ  
ス伯爵を選ぶあたり趣味が悪いとしか言えない。

毎日毎日あんなキザなセリフを聞かされたら、私はきつと尋麻疹  
で死んでしまう。

「あーあ、なびかないかしら。ねえ、いい方法知らない？」

「私に訊かないで」

「ねえ、どうしてディアーナはオルアレンさまが嫌いなの？ ちょ  
つと悪人なだけなのに」

「好き嫌いの対象外よ。興味が無いわ」

好きか嫌いかで問われたら 即答で嫌いだとは言えない。

けれど、好きな人ではけしてない。

私に構ってくるときに優しいのは、私と彼の間である恋愛ゲーム  
が理由だろうし、もしゲームがなければ彼が私に構うことなんてな  
い。

一生、関わることなんてない。

「あ、そっか。分かったわ！」

アンジェリカは何かが分かったのか、ガーデンチエアーから立ち  
上がると真正面にある私の椅子へと近づき座る。

ふんわりと甘い香りがした。

「ねえディアーナ、あなた、あたしに興味あまりないわよね？」

「え？ どうかしら……分からないけど。そうね、あまり興味ない  
わ」

「そうね、そうよね、だからよ」

しきりに納得した表情でうなずかれる。私には何が何のことなの  
かさっぱりだ。

「アンジェリカ、何がそうなの？」

「オルアレンさまがあなたに構う理由よ。興味が無い、なんて態度  
で示されたら自分の方に興味を持たせなくなるじゃない？」

でしょう？ と同意を求めてくるけど、あまり分からない。

「オルアレンさまは常々女性に大人気。なのに、自分になびかない

女性がいるなら興味を引かれて当たり前よ。言うなれば、ディアーナはバラ園に咲く一輪のポピーね。変り種だから手を伸ばして手折りたくなるのよ」

「自分もそうだから間違いないと断言するアンジェリカ。納得はできないけれど、もしそんな理由ならさっさと飽きてほしい。」

「ポピーはポピーで、ポピーの暮らしがあるのだ。純情なポピーの生活を邪魔しないでもらいたい。」

「その上、手折りたくなる？ 冗談じゃない。」

「勝手に煌びやかな姿をして、甘い香りを放っているのは結構なことだけど、それは自分の領土ですべきだ。勝手に人の領土に侵入してキラキラするのはやめてほしい。」

「しかもディアーナ、あなた手折られると分かったら反撃するタイプでしょ？」

「しないわ、面倒くさいもの」

「いいえ、するわ。だってあたしが気に入る人間だから。あたし、自分が気に入る人間って、絶対ピンチになると牙をむいて反撃するタイプなのよね」

「前に、オペラハウスで会ったときは嫌いだったんじゃないの？」

「そうね、でも今は好きよ」

「にっこりと笑顔を向けられてしまう。」

「アンジェリカは見ていて飽きない。いろいろと表情を変え、いろんな話題を振ってくる。一緒にいて飽きないといえれば飽きない人だ。こんな人がカノヴァス伯爵と結婚したら……想像がつかない。」

「でも、もっと分からないことがあるのよね」

「アンジェリカがぼつりと言葉をこぼした。」

「それが気になって耳を傾ける。」

「どうしても分からないのよ。どうしてオルアレンさまは、あなたのお母さまと婚約しているの？」

「身を乗り出して訊いてくる。」

私はぶつかりそうになるので慌ててティーカップをソーサーに戻した。すると、逃げ道を塞ぐかのようにアンジェリカは私の両腕を掴んで迫ってきた。

後ろはガーデンチェアの背もたれ部、前にはアンジェリカ、左右には腕置きがあつて動けない。

「アンジェリカ、何？」

「ディアーナが逃げないようにしてるの。あたしに迫られて嬉しいでしょ？」

「私は男性じゃないから」

押し倒されては困るので、何とか上体に力を入れて留まる。

「あたしならあんな人、興味の欠片も持たないわ」

鋭い一言だ。

普通、娘に向かつて『あなたの母親と付き合っている男性の心理が理解できない』とは言わないだろう。

でもアンジェリカはそれをする豪胆。齒に衣を着せぬ、とはこういうことを指すのだろう。

「あんな人、見た目がいいだけで全然素敵じゃないじゃない」

「それは 同意するわ」

母のどこがいいのか、それを訊かれたら見た目以外に答えられない。

それより、私はあの人のことをあまり知らない。

父が生きていた頃は、父に甘えている姿を見ただけで、私に構ってくれたことはあまりなかった。父が死んでからは葬儀のときに一言二言喋っただけで、それ以降会話らしい会話をしていない。

顔を上げてみると驚いたアンジェリカの顔が見える。

「どうかしたの？」

「いいえ、ちよつと驚いて」

「何に？」

何か驚くことでもあつたのだろうか。

「だって、普通自分の両親を悪く言われたら怒るものじゃない？」

あたし、ディアーナを怒らせようとして言ったのよ？」

「そうだったの、ごめんなさい。でも私、お母さまのことを悪く言われても怒れないわ」

そういう感情は、起きない。

たぶん、どれだけ口汚くのものしられても、怒りはしない。

だって、私はあの人に興味なんて持っていない。

父は大好きだったけど、でも母は 母との記憶は……

「母にとって私は、いない存在だから」

彼女の中には父しかいない。

私という存在は彼女の中に存在しない。

だから、私の中にも母という存在はいない。

「ディアーナ、あなた」

「何？」

「いえ、何も無いわ」

なぜかアンジェリカは苦い顔をして私を抱きしめてくれた。どうしてそうしたのか、訊いても答えてはくれなかった。

## 伯爵様のお気に入り11

「お母さま、失礼します」

静かに扉を開いて部屋に入ると四方から漂うきつい香水の香りが鼻腔を刺激した。

大きな部屋だ。使い手が広々と過ごせるよう計らい造られた母の部屋。一角にはプレゼントの山。一角には衣装の山。そしてぼつんと空いた場所に飾ってあるのは亡き父、デイクセンの肖像画。

そこだけは他と違い、余計な物で溢れていない。そのことから、まだ母の中に父への心があるのだと安心できた。

でも今は大きなカーテンで父の肖像画は隠されている。

それが意図するところが読み取れない私は、母、シエラーザがいる場所へと足を進めた。

「こつちへいらっしやい」

ゆるく手招きされて母に近づくと、子持ちとは思えない美貌の女性が私の方を向いた。

鮮やかさを失わない肌到人を引き付ける赤い唇。

記憶にあるときよりも、随分と化粧が派手になっている。

ここに、母の部屋に呼ばれることは驚きだった。私という存在を、この家の中で認めてくれているのだろかと、一瞬だけ期待が頭をもたげる。

「貴女、カノヴァスさまと何を話しているの？」

「伯爵と、ですか？」

取り留めのない会話しかしていないはず。

昨日だって彼がティータイムを邪魔しにきただけで、特に記憶に残っている会話はない。

「お母さまのことですわ」

「わたくしの？ ふふ……」

赤い唇がつり上がる。と刹那、頬に痛みを感じた。

視界が揺らいで呆然とした後、熱を持った頬を確認すると叩かれたのだと気付いた。

ゆるゆると顔を上げると歪に笑っている母が見える。

「……どうして」

呟いた私の声は震えていただろうか。

「どうして？ どうしてかしらね。貴女はわたくしのモノを奪う、いけない子かしら？ 違うわよね。もうそんなことはしないでしょ？ わたくしのモノに手を出したり、壊したり、しないでしょ？」

温かさの感じられない細い指が私の両頬に触れる。

それだけで底知れない恐怖が這い上がってくる。

母の瞳に映っているのは誰なのか。

鮮やかに美しく、どんな女性よりも煌びやかな姿が似合う人なのに、父がいないだけでこんなにも人間味を失くすものなのだろうか。

「わたくしのモノを取らないのよ。賢い貴女なら分かるわね？」

「私、お母さまのものを取ったりしませんわ！」

「あらあら 本当に？」

こちらを向く瞳の中に、焦点の合わないその瞳に、私は映っているのだろうか。

頬にあった手を後頭部に回され髪を引かれる。むろん、手加減などしていないのだろう。髪がちぎれる音が聞こえる。

痛みに顔をしかめると、冷たい手は離れていった。

「嘘つきは嫌いよ」

「嘘なんてついていません！」

伯爵を横取りなど、したいとも思わない。

むしろ、こちらはちよっかいをかけられている、いわば被害者だ。

「……そう、そうなのね」

精神が不安定なのか、怒っていたと思えば次は今にも泣きそうな顔をしている。

青白い顔で、気がなく、このまま倒れてしまうのではないかと



思えるほどだ。

「お母さま？」

「……貴女、貴女はわたくしの  
その続きは聞こえなかった。」

口にしたのか、していないのか分からない。

部屋の外にいるメイドに母の様子がおかしいとだけ伝え、私は部屋を後にした。

無理やり引つ張られた髪がまだ痛い。

もう、どのくらいになるのだろう。

（お母さまに名前を呼んでももらえなくなったのは、お父さまが亡くなってからだから……半年）

母は私の名前を覚えてくれていたのだろうか。

私の姿は映っているのだろうか。

（お母さま……私は）

首を振る。

母の中に私がないのなら、私の中にも母を残してはいけない。

それはとても辛くて悲しいことだから。

「……情けないわよね」

自分の頼りない声が耳に届く。

母に存在を忘れられている。彼女の記憶の片隅にも自分がいない。

そんな事実と向き合う勇気がなくて、家を出てきてしまった。

思ったより日差しはきつくなくて、散歩には最適日和。

賑やかな大通りを避け、足の裏に大地を踏める道を進む。

道中にある花々は、踏まれてもなお太陽に向かって咲き続けていて、そんな些細なことを見つけて微笑める自分がいる。

昔なら、じつと部屋の中で考え込んで、じめじめしていた。けれど、今気分転換にと外を歩いているのは

「伯爵の影響かしらね」

伯爵はどうでもいいことでも私を家の外へと誘って、私は日の光りに浴びせられる。

最初はどれだけ暇人なのだとか、鬱陶しい人だと思っていたけれど、幾度かそれが続くと柔らかい陽光は優しく、案外心地よいものだと知った。

変わってきていると思う。

伯爵と出会って、いろんな人と出会って、私は変わってきている。だから余計に辛くなることもあるのだろう。

今まで目を閉じ、耳を塞いでいたこと、それらとの激突。母での一件がいい例だろう。

(伯爵の所為で、余計なことに巻き込まれるわ。でも、あの人のおかげで私は変わってきている。……複雑だわ)

伯爵に興味はない。最初から大嫌いで、今でも苦手なはず。でも。

変化を期待しているのかもしれない。

私の中で、伯爵という個の存在の価値観が変わったら、伯爵の中の私も何か変わるのではないのかと。

母の娘ではなく、ゲームの遊び相手ではない、私という存在を見にくれるのではないだろうか。

「馬鹿馬鹿しいわ……期待するほうが間違いよ」  
誰にでも優しい伯爵さま。

甘い香りも、微笑みも、特定の人に向けられるものではない。

特別じゃなくてもいい。伯爵じゃなくてもいい。誰かに、私という個の存在を認めてもらいたい。それは過ぎた願いだろうか。

ふと、前方から人が歩いてきているのが見えた。

その人が普通の人なら、特筆する必要もないだろうし、気にも留めない。けれど、今回私の前の前に現れたのは、いつぞやのオペラハウスで見たあの黒いコートの男だった。

瞬間、息が止まる。

瞠目するように相手を確認すると、あちらはすっかりこちらを見

ていた。

たらりと、嫌な汗が流れる。

(……逃げるが吉かしら?)

どうしてなのかを考える前に踵を返して駆けると、背後で同じように地を蹴る音が聞こえた。

追ってくる相手に訳を問いたいけれど、今はそんなことをしている場合じゃないと直感が告げる。

人を射殺せそうな瞳、あれをどこで見たのか。

細い路地に入って駆け抜ける。途中で何かを蹴飛ばしたけれど気にしてられない。

「なんで、追いかけれなきゃいけないのよ！」

人通りは少なくて、誰もいない。

とりあえず大通りまで出ようと路地を出る直前、強引に髪が引かれた。あまりの痛みにも声を殺すと、相手はそのまま私の髪を掴み、後ろへ引っ張る。

無茶な体重移動の所為で重心がずれ、私は傍にあった壁に激突した。肩に痛みが走る。

あと僅かでも出られれば大通り。けれどそこはとても遠く、私を見下ろす相手から注意を逸らしてあちらに行くことは無理だろう。息を殺して相手を見上げると相手の赤い瞳が細まった。

「ディアーナ・フォルスマイヤー」

重低のバリトンが鼓膜を震わせてこちらに届く。

それを気丈に睨み返して声を張る。

「貴方は誰です。どうして私を追ってくるんです」

男は私が睨み返すとは思っていなかったのか、数秒とまる。けれど、その数秒が過ぎると唇が片方つり上がった。

「大人しいお嬢さんじゃないようだな。答える、お前はディアーナ・フォルスマイヤーか」

「……そうです」

「そうか。残念だな」

勝手に追いかけて壁に追い詰めといて、残念だとはどういう見だ。不満が募るが相手は私の気持ちなど汲み取りはしないだろう。伯爵でもないのだから、勝手にこちらの気持ちがばれるようなことはない。

「何か用ですか。用がないのなら退いてください。私、急いでいるので」

「そうか。だが行かせられないな」

大通りへ踏み出そうとした私の腕を取り、男は無理やり壁に私を押さえつけた。

腕を壁に押し付けられているので、痛いこと限りない。

身長差を考えて押し付けてほしいものだ。あちらが普通に押さえられているつもりでも、こちらは爪先立ち状態になる。

「誰か　んっ!？」

叫ぼうと口を開くと、黒い手袋をしている手が私の口を塞いだ。

大きな手の所為で、呼吸すらままならない。

じたばたと暴れてみるけれど無駄で、赤い瞳が私を見下ろしている。

取られていないもう片方の手で相手を殴ってみるけれど効果はない。

男は一層私に近づいて、低いバリトンが耳元でささやく。それは伯爵のように優しい声色ではなく、一切の感情を伴わない。

「悪いが、死んでもらう」

一瞬、何を言われたのか分からなくて、けれど掴まれていた腕が放され、代わりに取り出されたのは白銀のナイフ。

目を見開いて、相手を見つめて、赤い瞳が見えた。

どこを探したって、あの人の姿なんて見えないのに、探してしまっ自分が愚かしい。

そう、誰も助けになんてきてくれない。

伯爵様のお気に入り11（後書き）

脱文？ を見つけましたので修正しました。

/20

- 2011/08

## 伯爵様のお気に入り12

悲しいと思うのはきつと殺されることじゃなくて、私が死んでも誰も気にしないだろうと考えてしまうから。

抱きしめてくれる大きな腕がなくて、頭を撫でてくれる温かな手がなくて、泣いてもいいよと言ってってくれる人がいない。

その切なさに胸が苦しくなる。

振り下ろされる白銀。目の前に用意された刃。

まだ生きていたいと思った。

必要とされなくても、母に愛されていなくても、今からの人生が全部悲しいことで埋め尽くされていても。変わってきている自分が行き着く先を、あの人に見せたい。

なぜそんなことを願ったのか、自分でも分からない。けれど私は確かに、今以上に心臓が脈打つことを望んだ。

「イアーナを、離しなさい!!!」

大声が小路に響き渡ると、男の注意が背後に向く。

ぼふつと音がした。見上げると、彼に向かって投げつけられた袋から白い粉が舞っている。その粉を吸い込んだ瞬間、男は咳き込みだす。

腕への拘束が緩む。その僅かな隙にありつただけの脚力で相手の足を蹴り、大通りへと抜ける。

がむしゃらとはこういうときに使うのだろう。

明るい光り。小路を抜け切ると、目の前にいるのは 何故かフ  
ランソワ。

「ダイアーナ、こっちです!」

彼は私の手を取って引つ張る。

「フラン、ソワ?」

「わけは後で。アンジェリカさん!」

「いいわ、走って!」

後方から淡いドレスを纏ったアンジェリカが飛び出してくる。  
なぜフランソワがここに？　なぜアンジェリカが飛び出してくる？

状況整理ができないまま腕を引かれ、見知らぬ店に飛び込む。

追尾されているのに店に入ったら迷惑になるのではと思っただけで、ここはアンジェリカ御用達の店らしく、オーナーに話を通すと黒い男性が来たときには追い返してもらえるようになった。

私は頭の回転が追いつかず、ただただ呆然とするばかり。

飲食店と宿屋が合同したお店、といえればいいのだろうか。昼は食事、夜は宿舎となるようだ。個室に通されると、アンジェリカとフランソワは大きく息を吐いてへたり込む。

アンジェリカにいたってはせっかく可愛くセットしてあるヘアが乱れに乱れている。

「何がどうなってるの？」

傍にあるベッドに腰掛け、ポツリと呟いた私に非はないはずだ。けれど。

「それはあたしのセリフよ！」

猛烈に怒られた。

刺々しいオーラがアンジェリカから漂っているのは、見間違いないはずだ。

「……そう、よね。状況、まとめましょう」

「あ、じゃあ、僕から説明しますね」

言ってフランソワは私の目の前に来た。

ファラビアンで出会った時より、少しだけ痩せたようだ。が、やはりポツチャリ系。

しかし、なぜ彼がここに？

（そういえば、オペラハウスで会った時、黒い人と一緒にいたわよね）

疑うわけではないけれど、疑問は拭えない。

そんな私の視線を感じ取ったのか、フランソワはニヒルに笑った

ようだが、決まらなかった。

たぶん、彼的には爽やかさを演出したのだろうけれど……

アンジェリカは眉をよせ、なにコイツ、といった表情をしている。  
「フランソワ……さま、説明を」

「あ、ああはい。コホン！ 実は、ディアーナはあの男に狙われているんです！」

「……そうですね」

当たり前すぎて本音がポロリと出た。

どれだけ鈍感な人間でも、追いかけて追い詰められて刃物を振りかざされれば、自分は狙われているだろうと見当をつける。

フランソワは自分の言葉にもっと驚きが得られると思っていたのか、きよろきよろとして落ち着かない。

「あのー、狙われているんですよ、ディアーナ」

「ふん！ 当然でしょ、あの状況で自分は狙われてないって思うほうがどうかしてるわ」

ズゲシ、とフランソワの背中を蹴り飛ばし、先ほどまで彼がいた場所を陣取るとアンジェリカは私を睨んだ。

「きちんと説明してくれない？ いきなり『ディアーナが狙われているから助けてくれ』って言うてきたのはあんたよ、デブ」

「ディ、ディアーナの前で蹴ることはないじゃないですか！ それに僕はフラン」

「うっさいわよ、デブ。ディアーナ、説明して！」

立ち上がってきたフランソワをまたしても蹴飛ばし足蹴にすると、アンジェリカは豪快に腕を組む。

「そう言われても、私も分からないわ。アンジェリカ……それにフランソワさまも、どうしてあそこにいたんですか？」

「あたしはこのデブにディアーナが危ないって聞かされたのよ。こいつ、いきなりこの店に入ってきて、あたしの腕掴んで『ディアーナが危ないんです、助けてください』って。ホント、なに言ってるの、この気違いって思ったわ」



フランソワは床に這い蹲る形で、アンジェリカに足蹴にされている。

可哀想だとは思っけれど、助けようとは思わない。

「でも本当に狙われてたじゃないですか。あと、僕はフランソ

ワ

「そうね。それについては褒めてあげる。で、ディアーナ！」

「は、はい……ねえアンジェリカ、睨まないで。怖いから」

「この可愛いあたしを捕まえて怖いとか言わないでもらえる？ あなた、狙われるのに心当たりは？」

心当たり。そんなものあるはずもない。

私が外界と接触を持ち始めたのは極めて最近のことだし、最近といえば伯爵が茶々を入れてくるくらいで いや、だとしたら伯爵に好意を持つ相手は面白く思わないはず。

伯爵ラブな誰かに狙われた？

あの黒い男性は伯爵ラブ、な誰かに依頼されて私を亡き者に？

「……だとしたらサイアク」

「なに、心当たりがあるの？」

「や、伯爵がらみだとサイアクだなーって思っただけで」

「あー、それじゃあ……心当たり多すぎて分からないわね」

しみじみ言われて落ち込む。

アンジェリカは椅子に腰掛け、テーブルに肘をつく。もうあちらから問うことはない様子だ。

ようやく足蹴状態から解放されたフランソワは服についた埃を払い、コホンと咳払いして私の前に来た。

「フランソワさま、説明を」

「僕もアンジェリカさんみたいに敬称なしで呼ばれます！」

……状況を理解できないのかこのデブ！ と口に出そうな暴言は飲み込んだ。

見る人が見れば分かるかもしれない青筋が、額に浮かんでいることだろう。

「フランソワとお呼びすれば？」

「喋り方も是非、普通通りで！ 僕もディアーナを呼び捨てにしますし」

それは貴方が勝手にしたのだと、殴りながら伝えてあげたかった。「そう言うわけにはいきません。でも名前だけなら、フランソワと」「うーん、少々納得いきませんが、仕方ないですね」

重いため息をつきたいところを根性で堪え、私はフランソワを見据えた。

「状況を整理しますね。答えてもらえますか？」

「質問になら何でも答えます」

「ではまず、なぜ私が危険だと分かったんですか？」

「ディアーナへの愛ゆえです」

愛で危機察知ができるなら、誰だって愛する人を失くさずにすむだろうと考えて頭を振った。今は悲観的になっっている場合じゃない。私は窓際へと歩き、そつとカーテンを開いて眼下を確認する。黒い男性の影はどこにも見えない。

「ディアーナ、あなた、そのフランソワデブから求婚されてるの？」

「失礼ですよ。ぼ、僕はただ、一目ぼれをして。そ、それに僕の名前にデブの二文字はどこにも入っていません！ これでもダイエットの途中です」

「してたの！？ ダイエット。それで？」

「キ、キミは失礼だ！」

「事実を言っただけよ。で、ちょっとおデブなフランソワはディアーナが好きで、ディアーナの好みであろうオルアレンさまを目指しダイエット中なの？」

色々突っ込みたいけれど、もうそんな元気はない。

私が頭を抑えていると、フランソワがモジモジしながら小声で語る。

「だって、ディアーナはカノヴァス伯爵のようなスレンダーな男性

が好みなのでしょう?」

「……………え?」

「噂ですよ。ディアーナはカノヴァス伯爵にメロメロだと。でも、僕はあなたを諦めません!」

何だそれは。

どこから出たデマだ?

なぜ本人の預かり知らないところで、変な話ばかりが広がるのだろうか。

「僕が危険を察知できたのは、フアラビアン的事件であの男性を見たからです。彼は危険です」

「彼つて、黒い髪で赤い目ですか!？」

「そうです。彼、ギャリック・バレーがフアラビアンに火を放った犯人なんです! ディアーナ、ギャリックはあなたの命を狙っています」

「ちよつと待ちなさいよ。狙われる理由は? ディアーナ、ギャリックつて人、知り合い?」

「知らないわ。聞き覚えもないし」

「フアラビアンでの一件。僕、ディアーナから離れた時に見たんです、バラに火をつけるギャリックを。あの時は彼を追いかけて、でも途中でまかれてしまって。最終的には火に囲まれて気絶したらしいんです。後でディアーナの見舞いに行くと言っても家の者が許可してくれなくて、もう会うなって。あの時は、本当にすみませんでした」

しゅん、となつてしまったフランソワに、私は首を振った。

もしそれが本当の話なら見舞いに来ないことに対し、くそあのデブ、と言つた言葉を取り消しておかないと。

「それから僕はギャリックについて調べました。あまり目ぼしい情報はなかったんですけど、行動をチェックしていると、次第にディアーナが狙われていることに気付いたんです。一大事だつて思いました。けど、僕はディアーナに会えないし」

「会いに行けばいいじゃない」

「簡単に言わないでくださいよ。ファラビアンのことだって怒ってるだろうし、いきなり命を狙われてるなんて言い出されたら誰だって不審に思うじゃないですか」

たしかに、フランソワの言うとおりだ。

いきなり彼が家に来て、命を狙われていると言われてもあまり信じなかっただろう。それ以前に彼との面会を拒絶していたかもしれない。

「そこで、この頃ディアーナが親しくしているアンジェリカさんに助けを求めよう」と

「この店に来たってわけ？」

「でも、どうして今日、私が追われているところに現れたんですか？」

アンジェリカに助けを求めるため店に赴いたのだとすれば、私が追いかけてられていることを知る術はない。

超能力者でもない限り、私の危機を知ることができなかったはずだ。

声色に難を入れて問うと、フランソワは都合が悪そうに視線を逸らした。

「それは、その……マックから。僕の従者から連絡が入ったんです。彼は基本、ディアーナの護衛についてもらっています。あの、すみません、何も言わずに護衛なんてつけて。でも、でも、ディアーナが危険かもと思うと……」

そこで言葉は切れた。

狙われているだとか、命が危険にさらされているだとか、実感がわからない。

襲われたとはいえ、やはりどこか別次元の話の聞いているようで、現実味がない。

だって、伯爵はそんなそぶりを見せなかった。

もし私が危険なら、彼がいち早く気付いて処置をするのだろうと、

頭のどこかで考えている自分がいる。

危険なら、守ってもらえるのではないかと、あのオペラハウスのように、大丈夫だと言ってくれるのではないかと。

(私、まさか、期待してたの?)

……恥ずかしくて死ねそうだ。顔を覆ってしまいたい。

どうして思い出したりするんだろう、あの笑顔を。

### 伯爵様のお気に入り13

しばらく、無言だった。

あちらこちらに視線をさ迷わせてみるけれど、落ち着く場所などありはしない。

所詮、子供の集まりでしかない私達だけでは現状からの解決策など見出せるはずもないのだ。

ドレッサーの前に置かれた花が一輪、儂く見える。

「あたし、オーナーにギャリックって人が来たか確かめてみるわ」

「じゃあ、私も」

「あなたは狙われるんだから、ここにいなさい！」

ぴしゃりと言われ、肩がすくまる。

殺気立っているのだろうか、いつも以上に語気強く言われる。

アンジェリカが出て行くと、やはり沈黙だけが降りる部屋で私は所在なく息を吐いた。

「巻き込んでしまって、すみませんフランソワさま」

「そ、そんな、巻き込むだなんて。僕が勝手に首を突っ込んだんですから。ディアーナは気にしないでください」

気にするなと言われても、気になるのが私の面倒なところ。

仮に反対の立場なら、けして関わり合いにならなかつただろう。

他人の面倒事になど首は突っ込みたくない。

けれど、考えてみても分からない。なぜ狙われるのか。

伯爵絡みで不興を買っていたとしても、あんなにもはっきりと殺意を示すだろうか。女性というのは卑怯な生き物で、裏工作はしても、白昼堂々命を狙うようなことはしないと思う。人気がないとは言え、目撃されないとは限らない。

ギャリックは、なぜ私を狙うのか。結局はそれが分からないと対策の立てようもないのだ。

「フランソワさま。なぜ私が狙われるのか、ご存知ですか？」

「え？ デイアーナが狙われる理由ですか。……すみません、僕には分かりません」

頭を下げて謝られると、居た堪れない気分になる。

気分が落ち込んでいる。それは分かっている。

ぐるぐると出口のない答えを追いかけるのは私の悪い癖だ。

カーテン越しに見える明かりに惹かれ、窓辺まで行くと窓を開け放つ。

夕日が綺麗に落ちようとしていて、午後の風が部屋の中へ入り込んでくるのを肌で感じて目を閉じた。

「デイアーナ、窓辺は危ないと思いますよ」

「狙撃されるなら危ないでしょうね」

「狙われているんですよ」

「ええ、分かっています」

相手を挑発するつもりはない。けれどもし、私が見える位置にいるのなら、是非とも狙いにきてほしい。

知りたいのだ、狙われる理由を。もし本当に命を狙われているのだとしたら、こちらの対処の仕方も変わる。

お人よしのフランソワや、短気だけれど私を心配してくれるアンジェリカは遠ざけるべきだ。

「フランソワさま、ギャリックという人はどういう人ですか」

「ギャリックですか？ ちょっと待つてくださいね」

言ってフランソワはポケットから高級品の手帳を取り出した。

「えー、本名ギャリック・バレー。両親は既に他界していて、ソフィアという妹が一人います。元軍人で、現在の職は、依頼主を守る仕事のー」

「用心棒、ですか？」

「そう、そうです」

やはり知り合いですらない。

ギャリック・バレー。彼が私個人を狙う理由はないはず。だとしたらやはり、誰かに雇われたと考えるのが自然だろうか。

「軍役でいたときには凄腕だと評判だったそうですよ。特に剣の腕はあのカノヴァス伯爵に並ぶとかで　そうだ、ディアーナ。カノヴァス伯爵にギャリックのことを聞いてみたらどうです？」

「どうして伯爵に」

「カノヴァス伯爵はギャリックと同時期に軍に所属しているんです。部隊も一緒だったそうですよ、えっと、部隊長の名前は……」

フランソワの声が切れた。どうしたのかと視線を送ると、彼はこちらを不安げに見ている。

「フランソワさま？」

「え、えと……部隊長は関係ないですよね」

「それは分かりません。今はどんな情報でもほしいんです。カノヴァス伯爵とギャリックの隊長は誰だったんです？」

何かを隠すように慌てる様に、私はフランソワへと近づいた。

近づくだけ後退されるのでさらに近づく。何も咎めてはいないはずなのに、なぜこんなに引かれるのだろうか。

「フランソワさま、彼らの部隊長は誰なんです？」

「いえ、知らなくても大丈夫です。その人がディアーナに危害を加えることはないのです」

「どうして言い切れるんですか？」

「だって……」

「だって？」

「デイクセン＝フォルスマイヤー」

発せられた声に、ドクリと心臓が脈打った。

「彼らの隊長はディアーナ、あなたのお父さんです。でも、彼がこの件に関しているはずがないでしょう」

死んでいるのだから、当たり前だろうとフランソワは言う。

デイクセン＝フォルスマイヤー。私の父があのカノヴァス伯爵の上司だった？　いや、ギャリックという人も父の下で働いていた？

軍役とは帝都に属している地方の男子が16歳から30年の間で二年間、国のために働くことで、職は個々の適正によって振り分け



られる。

また任期二年とは最短期間のことであり、嘆願すればもっと長く軍役でいることも可能だ。

地方の有力者は軍役期間を活用し、国の基幹部署へコネをつくる輩が多いと聞いた。

もつとも、中流貴族程度の出身であれば軍役をパスすることもできるのだが。

（お父さまは軍人だったわ。お母さまがいつも、早く辞めてと言っていた。何が起ころるか分からないからって。でもお父さまは、市民を守るのが貴族の務めだって言ってる。上の者が下の者を守るのは当然だって。感謝される為に軍人ではない、自分の為に軍人であるんだって）

少しばかり父のことを思い出すと泣きそうになって、慌てて首を振った。

「父がギャリックの上司だったのね」

「ええ、カノヴァス伯爵と同時期にディクセンさまの部下についているので、もしギャリックについてもっと知りたいなら伯爵に聞くのが いや、違う」

「違う？」

「情報によれば、ギャリックとカノヴァス伯爵は仲がよかったそうなんです。身分は違いますが、意気投合していたみたいで」

「だったらなおのこと伯爵に聞いたほうが」

「もし伯爵がギャリックの仲間だったらどうするんです！」

そんなことあるはずがないと言いだそうとした私の言葉は、フランソワの手によって妨害された。

別に口を塞がれたわけじゃない。ただフランソワが人差し指を立てたのだ。

見目あまり麗しくない彼がそれをしたことにより、私の視界は大変残念なことになっている。

いや、別に人の体格をとやかく言ってもりはないけれど、人には

似合うポーズと似合わないポーズがあつて、今回はたまたま後者であつただけ。

「ディアーナが狙われたのが伯爵とギャリックの思惑だったら？」

伯爵があなたに近づいたのは、あなたを殺すためなら？」

「もしそうなら伯爵はもつとスマートな方法で私を殺しにきますよ。誰かを使って始末しようなんて考えないと思います」

「でももし」

「本気で私が殺したいのなら、伯爵は自分の手で始末しにきますよ。いや、これはきつと私の願望だ。

殺されるのなんて真つ平ゴメンだけれど、なんとなく、伯爵が犯人ならそうであつてほしいと思つた。

（でも、もし本当に伯爵が犯人なら一発殴りたいわね。……あの人は笑顔でいいよつて言いそうだし）

「ディアーナ、怖がらすつもりはないんですけど、用心してください。伯爵だけじゃなくて、他の人にも。あなたは狙われてるんですから」

私の手を取つて握つてくれる。心配、してくれているのだろう。

他人なのに、関わりだつて少ないはずなのに。小太りで、気がきかなくて、勘違いをいっぱいしてくれるけど、根は良い人なんだろう。

「ありがとうございます、フランソワさま。気をつけますね」

そう言つた言葉に嘘はない。

と、刹那、バシンと盛大な音を立てて扉が開いた。その先にいるのは無論アンジェリカと。

「なにディアーナ、あなたフランソワデブに口説かれてたの？ 邪魔した？」

「あら、こんばんわディアーナ。もしかして、いけないシーン、見ちゃったかしら？」

「ローラ、ディアーナが困っているよ。それにディアーナ、私を見上げてくれるのは嬉しいけれど、できればその手を離そうか。私の

前で他の男の手を取るなんて、いけないよ？」

たぶん、私は凄い顔をしていただろう。

想定内のアンジェリカはいいとして、その後ろに立つローレンシアさん及びカノヴァス伯爵。

今、あなたの悪口を言っていました、なんて口が裂けても言えない。フランソワなんて、なぜかガタガタと震えだす始末。

「カ、カ、カノヴァス、さま!？」

「フランソワさま、手を離してください」

興奮して力を入れているのか、フランソワに握られている手が痛い。

もしかしくなくても、フランソワは本気で伯爵のファンなのだろうか。先ほど警戒するようにとか言っていたのは嘘なのか？

「は、初めまして。僕はフランソワ＝ラブレーと言います。僕、あなたに憧れて」

「うん、そうかい」

にこりとスマイルをかまして近づいてくると、伯爵は私の掌の上、フランソワの掌に自身の手を置く。するとフランソワの手から力が抜けた。

「あ、あ、あの!」

「……ラブレー君」

甘い、甘い声が聞こえる。

それは先ほどまでのように遠くからではなく、なぜか耳元から。

肩が抱かれて、引き寄せられて、後ろに下がるとポスンと伯爵の胸の中に閉じ込められた。

強引なんて言葉は相応しくない、本当に、流れるような動作でフランソワの手の力を弱め、伯爵は私をフランソワから引き離す。

引き離れたついでに他の所に逃がしてくれればいいものを、なぜ腕の中に閉じ込める必要があるのだろう。

懐かしいような蜂蜜の香りに、心が騒いだ。

「女性の手を力いっぱい握ってはいけないよ。そっと、優しく、愛

する人の手ならなおのこと、ね」

「は、はい!!」

「伯爵、耳元で喋らないでください。あと離してください」  
アンジェリカが睨んでいて、むちゃくちゃ怖い。

伯爵やローレンシアさんの手前だからか、怒鳴ってはこないけれど凄いい形相だ。女の子がそんな顔しちゃうダメだろうと思えてしまうん？ けれどなぜ伯爵やローレンシアさんがここに？

「ローラと食事に来ていたんだよ。下でアンジェリカに会ってね。いつの間に仲良くなっただい？」

ぎゅっと、さらに抱きしめられて落ち着かない。

でも、自分の中にあつた緊張感のようなものが、徐々に消えていくのが分かった。気を張り詰めていたのだろうか。分からない。

「ディアーナは友人ですわ。カノヴァスさま、ディアーナだけはずるいです。あたしも抱きしめてください」

「あら、じゃあ私がディアーナを抱きしめようかしら」

「ぼ、僕も伯爵に抱きしめられたいです」

「はあ!?! 気持ち悪いこと言ってるじゃないわよ。このフランスワデブ。あんたがカノヴァスさまに抱きしめられるなんて100年早いわ!」

「100年後ならいいんですか!?! あと僕はデブじゃ」

「フランおデブ! そう言う問題じゃないわよ!」

「変に略さないでください!」

「ふ、ふふ、可愛いわね、この子達。面白いわ」

(ああ、アンジェリカ、素が出る。ローレンシアさんの突っ込みも、どこかの外れだし。でもフランスワ、伯爵に抱きしめられたいなんて頭がおかしいんじゃないかしら。それとも、伯爵は女性だけじゃなくて男性にももてるの? ……それは嫌だわ)

同姓に好かれるのは消していけないことじゃない。でも、モノには限度がある。

もし本当に同姓にももてるのなら、少しばかり哀れだ。いや、い

い気味だと笑うべきかここは。

「ダメじゃないか、ディアーナ」

「……な、なにがです」

「秘密なら私としよう」と、約束したのに」

コツリ、と額を伯爵のソレと合わせられ、瞳を覗かれる。澄んだコバルトブルーの瞳が優しく笑う。

この人を疑わないといけない。脳裏はそう告げた。

いや違う、巻き込んではいけなさと、そう思ったんだ。

綺麗な人を、女性をポイ捨てる最低な人だけど、優しい人。アンジェリカも、フランソワも、ローレンシアさんも巻き込んではいけない。

そう決断すると力づくで伯爵の腕を解き、部屋を出た。驚きで固まる人たちを置いて階段を駆け下り、店を出る。

考えがないとは思うけれど、これ以上に良い案が浮かばなかった。言い訳だと言えばそうなるけれど、あの時の私にはそれ以外を選択できなかった。

店を後にして数分後、首に衝撃が走るそのときまで、私は自分の選択が正しいのだと信じていたのだ。

## 伯爵様のお気に入り14

選り取った道が正しいと、胸を張るにはどうすればいいのだろう。後悔は幾度とした。空しさに拳を握って耐えたのも一度じゃない。現状を選り取り判断を下したのは自分で、だから誰も責められないのは当たり前。あの時だってそうだ。父が病気で臥せたとき、最善を選んで近づかないようにした。

医者 of 邪魔にならないよう、母の邪魔にならないよう、部屋に近づかなかった。

でも本当は、あのとき本当は 父の傍にいたかった。

墓地で泣いた。

拳を握り締めた。

悔しかったのだ。何もできない自分も、現実を受け入れず逃げた自分も。

最善を選んだはずなのに、湧き上がる後悔の念はどうしても塞ぎきれず、弱い部分を攻撃してくる。

今だって最善を選んだはずだ。だから後悔してはいけない。どんな現実が突きつけられても、私は自分で選んで行動したのだから。でも本当は？

本当は どうしたかったのだろう。

軋む身体に力を入れて脛を押し上げると、薄暗い闇の中で父の肖像画が見えた。分厚いカーテンからのぞく月明りが埃に散乱して一筋の道を作っている。

「目が覚めたか？」

低いバリトンが室内に響く。上手く働かない四肢を叱咤して音源に目を向けると、ソファーに腰掛けるギャリックの姿が見えた。

やはり黒い衣装を身にまとい、冴え冴えとした赤い瞳が妙に不気

味だ。

「こちらは床に放置されていたらしく、体のあちこちが痛い。」

「まさかお前から出てくるとは思わなかったが」

「……ギヤリック？」

「……俺の名前を知っているのか」

近づいてくる相手と距離を取ろうとするが上手くいかない。目の前まで来られ、見下ろされる。それに屈辱感を味わいながら私は相手を見上げた。

「ディアーナ」フォルスマイヤー」

「そうよ」

「随分と余裕だな」

「そう見えるのなら光栄ですね」

口だけでも負けるものかと気丈に返す。何も分からない状態だから、大人しくしておくことも考えたけれど、相手から情報を聞き出すには黙してもいられない。

見上げた先で見下ろしていた赤い瞳が近づいた。ギヤリックがしゃがんだのだ。

そして手を伸ばし、私の胸倉を掴むとそのまま引き上げられる。出会ったときもそうだったけれど、片腕で持ち上げられる。それは彼の腕力の凄さを示していた。

どう考えても婦女子にする対応ではないが、それを不満がることはできない。

痛みに耐えて呻くと、ギヤリックは眉をひそめた。

「お前のようなガキにオルアレンが執着する理由が分らん」

「私も、どうして貴方が私を狙うのか分かりません。事情を教えてくださいませんか」

「理由など聞かせても仕方ないだろう」

「勝手に殺されるなんて納得できません！」

理由が納得できたからと、殺されてはあげられないけれど。

ギヤリックは眼前に顔を近づけ、眼光鋭い瞳で私を射抜いた。そ

ここにあるのは確かな憎悪。

「……お前が憎いからだ」

「ですから、その理由を教えてもらえませんか。憎む理由はなんですか」

持ち上げられている腕に手を添えてもがく。力で敵うなんて思っていないけれど、息苦しいのだ。冷たい手に、ぎりりと力が入られる。

数秒間、黙ったギャリックだったが不意に私の腰を引いた。おかげでふらついた身体はギャリックにぶつかり止る。

痛みを顔をしめるけれど、相手は私の変化などお構いなしだ。

「……お前が」

何かを言おうとした唇が止まり、次いで顎をつかまれ視線を合わされる。

吐息さえ感じられる位置にいる男性。普段であればドキマギする自分に自己嫌悪をするのだろうけれど、今は状況が違う。

緊迫する空気の中。いつ首の骨を折られても不思議ではない。

心臓が脈打っているのが分かる。その鼓動に合わせ、自身が揺れている気さえする。

「……お前を殺せばオルアレンは怒るだろうな」

「伯爵、が？ 伯爵に恨みが？」

「お前が知る必要はない。……怖いか？」

わざとあざ笑うように問われる言葉に唇を噛む。怖いのは本当で、体が震えるのも本当だ。

でもそれを言ってやる義理はない。

ふと、するりと襟のリボンが解かれた。

「オルアレンは怒るだろうな」

ぼつりぼつりとボタンを外され焦る。如何に愚かでもこの状況が何を指すのか分からなくはない。

「離してください！ 離してっ！」

「離れたければオルアレンを呼べばいい。それとも、ディクセンさ



まを呼ぶか？ 助けてもらえばいいだろう、あのときのように」

耳元で聞こえるバリトン。あざ笑われるのは何故なのか。

「どういう意味です？ なぜお父さまを。それに」

「煩い女だ」

するりと首を掴まれ、絞められる。

感じられるのは果てしない憎悪。そして悲哀。

憎しみしか見せなかった瞳が、その後ろに悲しさを含んでいる。

「つい……か……っ！」

抱きこまれていた所為で身動きが取れない。

息苦しさだけが増して、自然と涙が目じりに浮かぶ。

どうして殺されなくてはいけないのか。ギャリックは伯爵を憎んでいるのか。

分からない。

ぐるぐると考えが渦巻く中、扉をノックする音が聞こえた。ギャリックが入室を許可すると扉から姿を見せたのはメイドで、彼女は優雅にお辞儀をする。

「失礼致します。ギャリックさま、ソフィアさまがお呼びですわ」

「……ああ」

「伝言を承っております。『ディアーナ嬢は殺すな』と。どうぞ、その手をお放しく下さい」

「そう、だな」

メイドの言葉に首を締め付ける手の力が抜けた。と同時に咳き込む。

新鮮な空気を取り込もうと大きく息を吸って、辺りを見渡す。

「さあ、ディアーナ嬢をお渡しく下さい」

こちらに近づきながら静かに告げる。縁の黒いメガネは彼女に良く似合っているし、顔立ちも愛らしい部類なのだが、声色が感情を見せない。

ギャリックは息を吐き、首を振る。

「俺が連れて行く」

「……ソフィアさま曰く。『兄さま遅い！』とのことですが」

「今行くと伝える」

「かしこまりました」

深々とお辞儀をして出て行くメイド。

その後姿が扉に消えるとギヤリックは髪をかき乱した。

「せっかくだったのにな」

苦々しく笑うと、こちらに視線を寄越す。

「せっかく俺の手で殺そうと思ったのに」

「理由も分からず、死ぬなんて……ゴメンです」

「強気だな」

ギヤリックの指が喉の中心を捕らえる。先ほどまで絞められていた所為か過剰に反応してしまい、肩が跳ねる。

「……怖いか？」

「怒っています。理不尽なこの状況に」

「……お前の瞳はデイクセンさまに似ているな」

「お父さまに？」

喉にあった指が下降する。とボタンが外されたたていた素肌に触れる。

びくついてなるものと身構えると、胸の谷間で指は止まる。

怖い。勿論、怖い。

成人男性だ。力で敵うはずがない。それに相手は私を殺そうとしている。こちらの言葉など聞き入れてはくれないだろう。

目を閉じたくなる。でもそれはできない。

ギヤリックはいったん指を離すと、同じ場所に次は掌で触れた。

「……っ！」

後ろに身を引こうとも、腰に回された腕が邪魔している。

「離して……下さい」

この声は聞こえただろうか。

震えていないだろうか。

怖がっているのがばれて、またあざ笑われるのか。

しかし、ギャリックの反応は意外なものだった。

「お前は、生きているんだな」

すっと合わさった瞳だけれど、そこにはあるはずの憎悪がなかった。

ただただ純粹に、悲しさだけ。

「婦女子の胸を無断で触るなんて、どういっつもりです」

「心音を確かめたただけだが。そうか、お前は女なんだな」

『お前は女なんだな』とはどういうことだ。見た目で十分に分かるだろう。

それとも、見た目では判断できないほど胸がないとでも言いたいのだろうか。

いや、でも人並み程度にはあるはずだ。

男だと思われていた。ということはないだろうけれど、女に見えられていない、そう言うことなのだろうか。

確かにエスコートするように扱ってほしいとは思わないけれど、これはあんまりだ。

さっきまであった恐怖心が怒りで上書きされる。

「煩い女って、さっきあなた言いましたよね？」

「ああ、そういえば言ったかもな」

「もう離してください。確かめたんでしょう」

「心音が速い」

「……いつまで、触っているんです。離してくださいって、言うてるでしょ、この変態！」

ばしんと、思いきりギャリックの頬を叩いてしまった。

やってしまった。

未だ拘束されているので逃げられない。下を向いたままのギャリックが緩やかな動作で顔を上げると、私を見て口元を吊り上げる

「自分の立場の分かっているじゃないガキだな」

「勝手なことをされて怒っているだけです」

「お前がオルアレンの気に入り、ね」

嫌な予感しかしない。

狙われる理由がなんにしても、いくつかの言葉がこの件に伯爵の関与を匂わせている。

「ソフィアの元に連れて行こう。お前がどうなるかはそこで決まる」  
言っつてやっつとギャリックは私を地面に降ろした。

「ソフィアって、妹さん？」

「ああ。あいつがお前を殺したがってる」

「……どうしてです」

何度目にもなる問いにギャリックは扉を指差した。

「行けば分かるだろう」

## 伯爵様のお気に入り15

私を呼びつけた人の人物像は、部屋の内装を見て大体想像ができた。

丁寧に片付けられた室内。広い部屋の中央奥に天蓋つきの大きなベッド。花瓶に活けられた花は鮮やかで、でもなぜかそこだけ無理やり色彩を足したように見える。

中でも特に強く感じたのは薬品の匂い。清潔よりは、どこか実験所的な匂い。

無音だからだろうか、余計な音を享受しない。そんな空間に誰かが咳き込む音が混じる。

「ソフィアさま」

傍にいたメイドがベッドで咳き込む少女、ソフィアの背を優しく撫でる。

その手を乱雑に振りほどいて、顔色の悪い少女が私を見つめた。アンジェリカと同じ位の年齢だろうか、私よりも年下の少女。

「いい、大丈夫。……あなた、ディアーナ？」

疑問というより確認で訊ねられた声に小さく頷くと、後ろにいたギャリックが私の背中を押した。

ベッドのある手前まで歩き、そこで止まる。

細い少女だ。けれどそれは女性として羨まれる線の細さではなく、何か欠乏している細さ。

病弱なのだと、一目で分かった。

「私にお話ですか」

「……ええ、そう。訊きたいこと、あるの」

「私も、貴女に訊きたいことがあります」

「兄さま」

ソフィアが目配せするとギャリックは無言で頷いて椅子を引き寄せ、私の手前に置いた。これは座れという意味表示だろう。

特に断る理由もないので座る。

「まず、自己紹介。わたし、ソフィア「バレー」

「私はディアーナ「フォルスマイヤー」

「貴女の母、シエラーザ？」

「ええ」

「父は？」

「……ディクセン」

「そう」

静かに呟き、憂い顔で俯くソフィア。ギャリックと同色の髪が肩からするりと落ちた。

「何度も言っただはずだ、ソフィア。コイツは俺の上司、ディクセンさまの娘だと」

「あまり、似ていないから……」

弱々しい身体とは異なり、強い瞳が私を捉える。その瞳の色もまた、ギャリックと同じ。

黒髪赤目。帝都内で珍しいその色は、時折、不吉とも噂される。

「訊きたいこと、一つ。なぜ、ディクセンさま、殺したの？」

「え？」

「なぜ、殺したの？」

問われている意味が分からず、呆ける。

彼女は一体何を言っているのだろう。確かに私の父、ディクセンは亡くなっている。

けれど父は病気でこの世を去ったのだ。けして誰かに殺されたわけではない。

「あの、誤解があるようなのですが、父は誰かに殺されたわけでは  
「

「いいえ。ディクセンさま、貴女に殺された」

肌突き刺さるのではないかと思えるほど刺々しい言葉に私は押し黙る。

身に覚えなどあるはずもない。父が病に臥せ、何もできないこと

に嘆いていたのは今でも鮮明に思い出せる。

悲しさ、やるせなさ、絶望感。その全てが苦しかった。

けれど、その苦しみを背負って、今を生きようと思えたのに。

伯爵や他の人と出会って、自分らしく生きていたいと、過去に囚われてはいけないと思えるようになったのに。

どうして、こんなことを言われなくてはいけないのだろう。

父を救えなかったのは確かにそうだ。けれどだからと、殺したと言われる筋合いはない。

「私は、父を殺してなどいないわ」

「いいえ」

「勘違いよ！」

「いいえ。デイクセンさま、貴女、と、貴女の母親、に殺された」

「私と、お母さまに？ 待ってください、説明をしてください。私たちがいつ父を殺したというんです!？」

「それすら、知らない？」

ソフィアが紡いだ言葉は嘲笑を孕んでいた。

蔑むという言葉が一番しっくりくるかもしれない。

「貴女、が死ねばよかった……っう！」

「ソフィアさま！」

「ソフィア、あまり無茶をするな」

「いい……えっ！ 言う。わたし、貴女、殺す。絶対……絶対、許さないっ！」

唇を噛み締めて憎らしげに私を見る少女の瞳は、まるで業火の神プルトンを宿したよう。

その小さく脆弱な身体で何ができるのだと反論することは可能だろう。けれど、それをしても意味がない。

彼女は確かに怒っている。

私の父、デイクセンを私が殺したのだと、そう思って。

父のために怒っている。

「殺して やる！」

こちらに伸びてくる腕。私は何も、しなかった。

か細く弱々しい腕では、私を絞め殺すこともできないだろう。でも、その腕を取ったのは私ではなく、

「俺がする」

「……にい、さま」

「この女の始末は俺がする。お前は休め」

緩やかな動作でソフィアの腕を戻し、彼女の髪を撫でるギャリック。その光景は、二人が仲睦まじい兄妹であることを匂わせる。

ソフィアもギャリックに折れたのか、小さく頷いて少しだけ微笑んだ。

ここだけ見ると美しい兄妹愛だけれど、彼女らの中で交わされている言葉は全く穏やかではない。

「分かった。この人、兄さまにあげる。でも、シエラーザ、私が殺す」

「なっ！ なに言ってる」

「ああ、お前の好きにしる」

「うん」

「ちよつと、私の話を」

「黙ってる」

私をそっちのけにして話がどんどんと進んでいく。

説明を求めたところで素直に話してくれないだろうけど、黙ってなんていられない。

周囲を見渡すと誰もがソフィアのことを気にかけている。

（これは、逃げる機会？ でもここがどこかもまだ分かってない…  
…かといってこの場所において私に利はない）

少しだけ足を後方にずらすと、すかさずギャリックが私の腕を掴んだ。痛みに顔をしかめると、振り向いた赤い瞳と視線が交じり合い、次の瞬間、私の体は宙に浮いた。

視界が揺れ、気付けば荷物を担ぐようにギャリックの肩に担がれている。



「後は頼む」

「お任せください、ギャリックさま」

「ちよ、ちよっと!」

「黙れ」

「黙らな　っ!」

「喋ると舌嚙むぞ」

歩き出されたために揺れ、口を開けていた私は盛大に舌を嚙んだ。どれだけ痛いかというと、ほんの少し涙が出るくらいだ。忠告なら歩き出す前に言ってほしいと思う私の意見は聞き入れてもらえそうにない。

ソフィアは既にこちらに関心がないのか、ベッドに横になってい

る。彼女に訊きたいことはいくつもあった。

でも。

正直、訊くのが怖い。

何がどうなっているのか。言われた言葉は真実なのか。

ありえないと、分かってはいる。

けれど、でもだからこそ、誰かに後押しという言葉をかけてほしかった。

『そんなことはない』と。

それが虚実のどちらでも。

元いた部屋に戻ると、埃交じりの空気が出迎えてくれた。あのときは気にもしなかったけれど、ここは物置部屋なのだろう。

そこらかしこにある調度品には埃除けのシーツが被せられている。ギャリックは私を適当な場所に降ろすと、唯一シーツが掛かってないソファアへと腰を落ち着けた。

なぜそんなに偉そうなのか、不服だけれど睨む以外に何もできない。

「おい」

「……なんです」

「これからどうなるか分かっているか？」

「……殺されるんでしょう」

「助けは呼ばないのか？」

「誰が来るんです、こんな所に」

「呼んでみれば、来るかもしれないぞ」

「……誰を呼び出したいんです」

私の問いにギャリックは片眉を上げ、こちらを見ると不敵に微笑んだ。爽やかさなどどこにも見えない、悪役っぽい笑みだ。

「さてな。誰だと思う？ 正直、俺はお前の命に興味はない」

私の命に興味がないのなら今すぐここから帰してほしい。

無理やり連れてこられて、父の死が私の所為だとか言われて、もう脳内はパンク寸前だ。

ギャリックは長い足を組み替えて天井を見上げた。

「デイクセンさまは俺の上司だった」

「それで？」

「……なぜ亡くなったのか、それが知りたい」

「だから、父は病気で！」

「違う！！」

怒声と共にギャリックが片手でソファアームを殴る。

「デイクセンさまは殺された。お前らをかばってな」

「私たちを、かばって？」

「どういう、意味だ。」

そんなこと、聞いた覚えはない。

いや、違う。

私は何も見ないようにしていた。何も聞かないようにしていた。だから、真実を知るはずもない。

もし。

そんなことがあるはずないと、心はそう告げるけれど、払拭でき

ない恐怖に身がすくむ。

「そんなことも知らず、のうのうと生きているお前らをソフィアは許せないのだろう。あいつはデイクセンさまに救われた」

「私、は」

「お前がデイクセンさまを殺した。不可抗力だとか、そんなのはどうでもいい。デイクセンさまが死を選んだ原因、それは、お前らが無力だからだ。お前らを守るべく、自らの命をあの方は差し出した。俺はデイクセンさまを殺した奴を許さない。ん？」

バタバタと、廊下から騒がしい足音が聞こえてくる。

「誰か、招かれざる客が来たみたいだな。お前を助ける奴か？」

言ってギャリックは立ち上がり、扉に近づく。

「待って、待ってください！ 父は、本当に殺されたんですか!？」  
走って、ギャリックの片腕を無理やり掴んでこちらを向かせる。

振り払うことはきつと、簡単だったのだろう。けれどギャリックは私の手を振りほどかなかった。

「お前が殺した」

冷徹な声色が、体温を奪っていく。

信じない。そう思うのに、上手くいかない。

だって私は何も知らない。知ろうとしなかった。

ふと、頬に冷たさを感じた。それはギャリックの手で、温かさの感じられない手が、私の首を絞めたその手が、私の頬を撫でる。

「お前を奪えば、オルアレンは怒るのだろうな」

「……伯爵は、怒りませんよ。たかが小娘一人に」

「いいや、お前は特別だ。アイツにとつて。だからこそ、価値がある。……覚えておけ。俺はいつでもお前を殺せる。だがそれは今じゃない。オルアレンを苦しめるため」

そこまで言って私を見たギャリックは、すぐに顔を背けた。

「伯爵に恨みが？」

「……お喋りが過ぎたな」

頬にあつた手が肩を強く押し、私がよろめいた隙にギャリックは

部屋を出て行った。

追い掛けようにも無常に閉じた扉が開くことはない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8447r/>

---

伯爵様のお気に入り

2011年10月3日01時09分発行